リアルダンジョン

須磨彰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リアルダンジョン

【Ｎコード】
Ｎ２８９１Ｋ

【作者名】
須磨彰

【あらすじ】
悪友二人に騙されて、リアルダンジョンという体験型ＲＰＧをすることに、ゲームのことをよく知らない主人公は手足のように動かせるキャラクターに喜んでいたが・・・
主人公はちょっぴり不幸体質なのはＡＫＩの作品を通して共通ですので、ご安心くださいませ。

現実世界Ａ

現実世界Ａ

「ガンちゃん。俺たちがお金出してあげるから、ね、一緒にやろうぜ。」

「そうそう。僕と幹久が５００円もカンパしてやるんだから、やろうよ。」

そう言って、俺を無理やりゲームセンターに誘ってきたのは、幼馴染であり、悪友と呼ぶにふさわしいほど、色々なことを一緒にやってきた、城崎幹久と黒崎要だ。先ほど幹久が俺のことをガンちゃんと呼んだが、俺の名前はガンではない。岩倉翼、苗字の岩倉から、昔からあだ名でガンちゃんと呼ばれている。

「あのなぁ。俺がゲーム苦手なのは知ってるだろ？同時プレイだから三人が納得するまで、死んでもお金を何度もつぎ込まなきゃならんゲームになんて何で参加せにゃならん。」

「いいじゃねぇか。５００円も援助するんだぜ？」

幹久にそう言われて、ゲームセンターに置かれているゲームはすべて１００円だと思っていたため、５回のコンテニュー分だしてくれるんなら、まぁそんだけ、死ねば流石に二人もあきらめるだろうと思っていた。

「一応５００円じゃたりないかもしれねぇし、お前の財布の中身両

替しておけよ。このゲームお札は使えないからな。」

「あ？五回もやったら十分だろ？」

そうは言うものの、何故か俺の財布を要に取り上げられてしまい、両替がなされる。先ほどの発言におかしいと思うべきだったのかもしれない。財布は常に必要以上入れてこないのが常だったのだが、偶然？バイトで貯めた生活費をおろしていたので、五千円も持っており安っぽい財布の中には免許証すら入っていなかったが、五千円札をすべて悪友たちの手により１００円玉に両替させられて小銭だらけになってしまった。

「じゃあ、中にマイクとイヤホンがあるから、それで俺たちと会話できるから。」

「了解。」

何の説明もされぬまま、俺は一旦二人に別れを告げて、体感型ＲＰＧ“リアルダンジョン”のゲーム機の中に入っていく。

「うわ。すっげぇな。まるでロボットのコックピットじゃねぇか。」

普段ゲームをしない（お金がなくてできない）俺でもこのくらいの知識はあり、戦闘機のコックピットと言うには計器が足りないが、その中はかなり本格的なつくりになっているのが分かる。

「えっと、とりあえずマイクとイヤホンだな。」

俺は操作方法すら教えてもらってなかったので、マイクとイヤホンを通じての二人からの説明だけでゲームができるようにならなけれ

ばならない。

「おい。幹久、聞こえるか？」

「おうおう。完璧だぜ。んじゃまず５００円とさっき渡したカードを入れてそこにある赤いゴーグルをして座席に座りな。」

「５００円を一気に入れるのか？」

「おう。１プレイ５００円だからな。」

「なぁにぃぃぃ！！」

「言ってなかったか？とにかくさっさと入れろ！」

「くそう。だから俺が給料を下ろすのを見計らって声を掛けてきたんだな。俺は五千円を絶対につかわねぇぞ。」

「はいはい。どうせ負けず嫌いなガンちゃんは５００円じゃおわらねぇんだから期待してるよ。」

こいつらとは腐れ縁、格闘技オタクでゲームなんて全くやらない俺に逆にゲーオタの二人はいつも対戦ゲームなどをすすめてきて、俺と対戦してはフルボッコにしてきやがる。一番簡単な必殺技といわれているコマンド入力すらできない俺に超が何個も着くような必殺技を連発し「実戦では強くてもゲームの中じゃ最弱だな。」といつも小馬鹿にしてくるのがムカついて毎回ムキになって挑む性格を理解しているのだ。

「おっと、コマンドが分からないからやめるなんて言わないよな？

体感型ＲＰＧつまり、お前は自分の体の動きでキャラクターを扱うんだぜ？」

「分かったぜ、少なくともＡとかＢとかコマンドがねぇだけ俺にでもできるだろ。」

そう言って幹久の罠にはまるのは悔しかったが、５００円を入れてゴーグルをつけると座った。ゴーグルを着けると、いきなり眩しい閃光がはしり、目がくらむ。

現実世界Ａ（後書き）

再転の姫君はどうしたんだ！！という声が聞こえてきそうな気がします。

再転のあちらの作品は二つほどストックがあるのですが、活動報告にも記載しましたが、諸事情により更新がままならないことが考えられます。そのため、完結まで書きあげてある作品を一つだけ執筆中小説のところに保存してケータイでも投稿できるようにいたしました。更新できる環境が整うまでの間、このような形で対処いたしますことなにとぞご容赦ください。

LV1

LV1

ピーピーピピピピッピ！

「認証番号一致、リアルダンジョンにようこそ。あなたの名前はガンちゃんさんですね？今からリアルダンジョン、始まり都市、セイラへ転送いたします。」

眩しさに閉じていた瞼を開けようとするが、辺りが真っ暗で良く見えない。しかし、耳にはどこかで聞いたことがあるような音声が流れてくる。そして、徐々に視力も回復し、自分の状態を確かめることができるようになり、心も落ち着いてくる。

「幹久の奴だな・・・ガンちゃんさんなんて敬称がだぶっちまってるじゃねぇか。」

先ほど渡されたカードはゲームを始める前にキャラクターなどを設定できるものだったらしい。全て幹久に決められたのはムカつくが、ゲームのことをあまり知らない俺が決めようと思ったら何をして良いのか分からなかっただろうから、それはそれで助かった。

「うお、何じゃこれ超リアルじゃね？」

最初に始める人には色々なナレーションがつくらしく、目の前を様々な画像が流れているのだが、残念ながら回復仕切っていない俺に

は音声のみしか正確には判断できない。音が消えると本当にゲームの世界に入っているような気分になる。というか、手足を動かしたらその通りに動いてくれる。

「なんだぁ！？体験型ＲＰＧって、自分の体をそのままゲーム内に持ち込めるんだ。これなら操作とかじゃねぇから、めっちゃくちゃ楽じゃん。」

「全部独り言が俺たちに聞こえてるってわかってんのか？」

「恥ずかしいよ・・・」

マイクでつながっていることを忘れていたらしい。ちょっと自分の発言に恥ずかしくなる気持ちもあったが、それ以上にこのなんとも言えない高揚感の方が先にでて、そしてそのことを悪友たちに告げる。

「おう。幹久に要。これなら俺にも操作できるぜ。しっかし俺のコスチューム、エロいなぁ。」

「おう。そいつはアーチャー&ランサーって言って弓と槍を武器チェンジしながら使って攻撃するキャラだぜ。」

なるほど、このキャラクターはランサー&アーチャーというのか、俺の質問にさらにそのキャラの特性などを幹久が説明してくれたが、そんなことよりも気になることがでてきたので、俺は幹久の言葉を無視で質問を投げかけた。

「なぁ・・要も槍を持ってるのに、何で男キャラなんだ？」

「ん？男女の区別は職とは関係なく選べるからな。」

「じゃあ何で俺だけ女キャラにしやがったんだよ。俺もカッコ良い男キャラがよかったし。」

「バカ野郎。それじゃあむさっくるしいパーティ（ＰＴ）になるじゃねぇか。お前はいや、お前のキャラは俺たちのＰＴの潤いなんだ。」

馬鹿なのか？こいつは？いや・・・馬鹿なんだったな。こいつとはかなり長い付き合いになるが、頭の回転は決して遅くは無い、推理系のゲームやパズル系のゲームも得意な幹久はむしろ普通の人と比べたらすごく能力が高い方だろう。しかし、残念ながら、頭の使い方が悪いのだ。

「ほざけ、結局中身は男だろうが。」

「黙れ、お前は今後操作で解らないことがない限り口をきくことを許さん。」

「はいはい。どうせ俺は集中しだしたら、無口になんだからおしゃべりは二人でしてろよ。」

一応正当な理由をあげて抗議してみたのだが、そこは幼馴染、俺の癖や行動パターンは理解しているらしく、言いくるめられてしまう。

「うむ。やはりガンちゃんを選んで正解だったな。」

「僕たちの夢をせいぜい壊さないように頼むよ。」

「へいへい。」

どうせゲームはそれほど得意でもないし、悪友たち二人の様にゲームセンターに入り浸り？むしろ住んでいるのかな？というような奴らと違いこだわりはないのでやる気のない返事を返して、俺たちはとりあえず街を出てダンジョンへ向かうことにした。二人は既に一度プレイしたことがあったが、ＬＶ１のダンジョンですらかなり難易度が高いらしく、まだクリアしたことはなく、ネットの情報でのみ知りえるＬＶ１ダンジョンクリア後の情報を元に動いているらしい。

「とりあえず、お前はランサーじゃなくてアーチャーになっておけよ。お前みたいなゲーム初心者が肉弾戦なんて無理だろうから、遠くの方から矢でも打ってろよな。」

「これだけ自分の体みたいに自由に動かせるんだ。ランサで行くぜ。俺の格闘技センスを見せつけてやるぜ。」

「しゃあねぇな。一回死んでコンテニューし直したらアーチャーになれよ。」

「わかったぜ。」

あ、さりげなくこいつらが満足するまでに死んだら５００円で済まないことが、今、確定した気がする。まぁあいつらの口車に乗せられたのは悔しい気もするが、これだけ自由に動けるならまず死ぬことはないだろう。

「とりあえず、ダンジョンに入ったら俺らについてきな。どうせアイテムを拾ったりするのはなれないがんちゃんには無理だろうから、

ラストアタック（ＬＡ）だけ取ったら二分の一の確率で薬草だけは出るから、それを使いながら行けばいいさ。ベルトに、今ある薬草だけセットしておけよ。そうしたら自動で補充してくれるからさ。」

「ベルト？」

「カバンを開いてみて、そうしたら薬草があるから、それをベルトのところに置くんだよ。そうしたらすぐに使えるよ。」

「了解。」

俺はカバンを開くといきなり立体映像が現れ、ベルトセットというメニューがあったのでそこを触ると、カバンの中から三つほどベルトに薬草が動いたので、それを確定してカバンを閉じる。

「カバンはやっぱりゲームなんだな。」

「当然だろ。持ちものの限界まで持って行って、ダンジョンクリア後の街で売れば結構な金になる。とりあえず武器が強くなるまで、そうやってお金をためるんだよ。」

「でもさ。お前らＬＶ１ダンジョンクリアできなかったんだろ？どうやって金ためるんだよ？」

「一応敵が落とした金が少し貯まってるからそれで薬草をたんまり買い込んだぜ。あと、要の奴は第二武器も手に入れてるしな。偶然落ちたんだとよ。」

「なるほどな。じゃあもう、第一段階の武器はもってねぇのか。」

「いや。このゲームは鍛冶屋システムの影響で、初期武器が最終的には一番強く化けるらしいからな。初期武器は絶対に捨てないのが鉄則なんだ。」

「へぇ、じゃあ俺もこの武器が一番強くなるんだ。」

「そういうことだ。俺はウォーリアーだから防具に盾があるが、お前らは武器しかねぇから初期武器だけは絶対にすてんじゃねえぞ。」

「はいはい。まぁこんだけ扱いやすそうな槍なら、第二段階もいらねぇぜ。」

「制限プレイじゃねぇんだから、第二武器が落ちたら使えよな。」

「アイテム拾いは任せたぜ。」

そんなことを言いながらも、ダンジョン転送場所までついた。ゲーセンには4台しかないリアルダンジョンのゲーム機も全国各地に置かれているのだから、当然全国から人が集まっており、そこには人だかりができていた。

「すっげぇ。なんか強そうな武器を持ってる人もたくさんいんじゃん。」

「まぁそうだな。とりあえず、俺たちは上級者様たちにはまだ追いつけないからＬＶ１ダンジョンに向かおう。」

幹久と要にタイミングを合わせてＬＶ１ダンジョンへと行く。マイクとイヤホンは同じゲーセン内で通信可能だが、同じダンジョンに行くにはあそこでタイミングを合わせて１分以内に入る必要がある

んだとか。偶然ＬＶ１ダンジョンに入る人は俺たちだけだったらしく、三人で入ることができた。

「まぁ明らかに友達三人で入ってるんだから、遠慮したんだろうけどな。同じゲーセンで同時に入ってるときには割り込まないのがマナーってもんよ。」

「そうなんだ。とりあえず、どんな技ができるのかだけ教えろよ。」

「簡単だぜ。立ったまま突き、ダッシュ突き、ジャンプ突き、下段突き、あとは薙ぎ払いの５パターンで攻撃すればいいだけだからな。お前の選んだランサーってキャラは攻撃手段が多い代わりに防御手段がないから、避けるしかないんだ。どうしても避けきれない敵にはアーチャーになって遠くから攻撃ってわけさ。」

しゃべるなと言っていた割には丁寧に色々なことを教えてくれる。幹久も要も、以前二人で遊んだ時にはクリアできなかったこともあり、多少とはいえ戦力として期待しているので、情報は包み隠さずにおしえてくれる。

「なるほどな。まぁ充分だろ、てか敵出てこねぇぞ。」

「すぐに出てくるって、僕の槍さばきを手本に見てなよ。」

要はそう言って、少しダッシュすると俺よりも前を歩きだした。俺は真っすぐ歩いてるつもりだが、要の奴はカクカク動いているから、やっぱりそこら辺はゲームなんだなと実感する。

「てかお前本当にガンちゃんか？俺たちですら最初はまっすぐ歩くのにも苦労したのに普通に俺たちについてきてるじゃん。」

こんな簡単に動かせるのに、と思いながらも、普段散々俺のことをゲームが下手っぴといっていた二人にゲーム内で自分とは違う体になって少し膨らんだ形をした胸を張る。

「俺のセンスを見損なうなよ。体感型ってことは俺みたいなゲームよりも、実戦に強い奴には当然有利なんだよ。」

「なんだか、お前にゲームで負けるのは悔しいぜ。」

「言ってろ。お？敵が出てきたみたいだぜ。お前も行かないでいいのか？」

「とりあえず、最初の敵は雑魚だから問題ないだろ要の動きを見ておこうぜ。」

幹久の言う通り、要はダッシュで敵に近付くとそのまま突きをして一撃で敵を一匹倒すと、薙ぎ払いをしてもう一匹いた敵を吹き飛ばし、今度は倒れている敵にしゃがんで下段突きをして敵を倒してしまった。

「流石に二段階の武器を持ってると一撃で倒せるんだな。このまま要一人でもボスまで行けるんじゃないか？」

「まぁ余裕だろうけど、ここらでガンちゃんの操作慣れをしておかないとボスで即死だよ？」

「確かにその通りだな。じゃあ次はガンちゃんやってみようぜ。」

「ヘイヘイ。」

そのあと何十匹も敵が出てきたが、俺は先ほど見た薙ぎ払いで、敵を寄せ付けない方法などを使って軽々と敵を葬り去っていく。ダッシュ後にジャンプして、突きをくらわせると一撃で倒せることが判明して、６つ目の隠し攻撃コマンドとしてダッシュジャンプ突きがあることまで見つけてしまった。

「どうだ？俺の実力思い知ったか？」

「ああ、驚いたぜ、しかも初心者にありがちなごり押しじゃなくって、全部の敵からの攻撃を避けてノーダメージで進むなんて、やるじゃねぇか。」

「よし、このまま俺を前衛にして進もうぜ。俺が一撃加えて倒しきれなかった奴に、お前らもダッシュジャンプとか下段とかやってみろよ。どうせ俺たちの方が攻撃速度速いんだから、ミスったら適当に切りつければいいんだしよ。」

「あ、ああ、そうだな。俺たちもコマンドの練習させてもらうぜ。俺は盾をもってるからジャンプコマンドの代わりに防御コマンドだけどな。」

俺たちはそのあとも順調に進んだ。アイテムは全て二人の手元に行ってしまったが、正直攻撃を受ける気がしないので俺は問題なく薬草を少し使うことはあっても基本ノーダメージでボスまで進んでしまった。

「おいおい、ここまで１０分ほどで来ちまったぜ。めちゃくちゃすげえじゃねぇか。」

「そうだな。このままサクッとボスも倒せるといいんだけど・・・。」

「ガンちゃんがいれば問題ないっしょ。俺はボスの動きにはついていけなかったから、今回はアーチャーで遠くから狙撃にさせてもらうよ。」

「了解。間違っても俺にあてるんじゃねぇぜ。」

「くそ、こいつ調子に乗りやがって。」

幹久から恨み事が聞こえたが、その声は普段ふざけ合っている時の声で、怒っているわけではない。

「がっはっはっは。俺のところに来るとは運が悪い。この宝は俺のものだ。誰にもわたさねぇぞ。」

「おいおい、典型的なボスキャラのセリフを言い出したんだが、こいつがボスか？」

「ああ、あの大きな腕に気をつけろよ。一発でライフゲージの半分は持ってかれるぞ。」

「はいはい、どんなに強い攻撃も当たらなければ意味がないってのを教えてやるぜ。」

俺は宣言通り、ボスの攻撃を紙一重で避け続け、サクッとボスをやっつけて見せた。遠くで狙撃していた要もフィールドの端に追いやられて攻撃されて一回死んで、幹久も盾でうまく防御していたがライトウォーリアーの盾は貫通ダメージがあるらしく薬草が切れて奴

も一回コンテニューしたが、俺はノーコンテニューでＬＶ１ダンジョンをクリアしてしまった。

「まったくガンちゃんには驚きだぜ。本当に全部の攻撃を避けちまうなんて、ありえねぇほどゲーム操作をマスターしてるじゃねぇか。」

「まぁ俺に言わせればあんなノロイ攻撃避けられないお前らの修行がたりんわ。」

普段から道場に通って体を鍛えている俺からしたら、師範代の突きの方がよっぽど恐ろしい、あんな攻撃はゲームの世界でなくても何ら恐ろしいことはないだろう。まぁ、俺が通っている道場は結構特殊な道場らしいから、それも原因かもしれないが。

「こいつ、言わせておけば・・・」

「まぁまぁ幹久、何と言ってもガンちゃんのおかげでＬＶ１クリア報酬の１０万円と第一の街にこれたんだから良いじゃないか。」

「確かにそうだな。さっそく鍛冶屋に行ってみようぜ。」

街の中を探索しようとおもったが、フィールド自体も先ほど見たセイラと比べると、半分ほどの広さしかなく、それだけ狭いにも関わらずセイラよりも広く感じてしまうほど第一の街は始まりの都市とは違い人はあまりいなかった。というかダンジョンをクリア後の街なので用事さえ済ませればチャッチャと通り過ぎる街なので当然かもしれない。

「なぁ、この切れ味ってのは上げておいた方がいいのか？」

そんな中、先ほど幹久が言っていた鍛冶屋という場所にはかなりの人数が詰めかけており、そこで俺はよくわからない説明文が描かれた紙を見つけたので、二人に尋ねる。

「当然だな。この切れ味ってのを、上げていくことによって武器の強さが上がるんだからな。」

「ふむふむ。デスペナルティは３０以上からマイナス１で４０以上からはマイナス５、５０以上はマイナス１０・・・・ってことは５０以上の武器を持ったらデスペナルティやばいんじゃね？」

「当然だろ。デスペナルティも無しだったら武器が永遠に強くなって難易度が急激にさがるじゃないか。とりあえず３０までは切れ味は上がる一方なんだから上げておくぞ。」

俺たちは今、手持ちの武器をすべて切れ味プラス１にし、鍛冶屋をでると、鍛冶屋ほど人は多くはないが、また人が集まっている場所、道具屋に行った。要と幹久は始まりの都市で買った薬草をボスで使い切ってしまったので補充して無一文になっていた。

「お前ら俺と違ってドロップアイテムとか大量に仕入れてお金もちになってたんじゃないのか？」

「その分燃費が悪いんだよ。ってかお前みたいにノーダメージ狩りなんてできねぇから当然だっつうの。」

そう言われてみればそうである。というか、ＬＡを何度かとって手に入れた薬草だけで十分カバンの中には薬草が増えていたので、俺はボスクリアの報酬で得た１０万のうち２万を使って鍛冶屋で武器

を鍛えたので９万も手元に残ってしまった。

「どうする？ＬＶ２ダンジョンに行くかもう一度ＬＶ１ダンジョンに行くかどっちがいい？」

「当然ＬＶ２だろ。たとえ死ぬことになったとしても、新たなダンジョンに希望の光を見い出すんだ。」

「そんなの言ってるが、お前ら１０００円しか持ってこなかったんじゃなかったか？次死んだらゲームオーバーだろ？」

俺がまさかの健闘をしたことで、本来ギリギリでもＬＶ１をクリアできたら良いなと思っていた二人は良い意味であてが外れたため、次のステージに関しても、クリアを目的というよりも、新しいダンジョンを楽しむために進む考えのようだ。

「んじゃお前が前衛で俺たちが死なないようにしてくれよ。もちろんアイテムはくれよ。」

「ヘイヘイ。ＬＡの薬草だけで俺は十分だから任せとけよ。」

「頼もしい限りだぜ。」

こうして俺たちは少しだけ武器が強化された状態でＬＶ２ダンジョンへと向かうのだった。ついでに、ボスが落とした宝箱には、ヘビーウォーリアー用の第二武器が落ちたので幹久はヘビーウォーリアーにジョブチェンジをしてノロマだが防御の高いキャラに変身している。

？

武器情報【1】

ランサー&アーチャー
スタンダードランス
基本攻撃力１５（すべての追加効果をつけられる）
マジックランス
基本攻撃力２５（攻撃時１＋ダメージの１％をライフ回復）
スタンダードボウ
基本攻撃１（すべての追加効果をつけられる）

ライト&ヘビーウォーリアー
スタンダードソード
基本攻撃力１０（すべての追加効果をつけられる）
ライトシールド
防御動作時のみダメージの半分をカット
スタンダードメイス
基本攻撃力７（すべての追加効果をつけられる）
ヘビーメイス
基本攻撃力１５（時々クリティカルヒットが発生・ダメージが二倍に）
ヘビーシールド
防御動作時のみダメージの９割をカット（その重さゆえ動きが遅くなる）

注）ゲーム内の切れ味の最大値は９９。

第二段階の武器は切れ味＋２０までつけられる。

？

LV2

ＬＶ２ダンジョンに進んだ俺たちだが、なんてことはない、ＬＶ１ダンジョンの敵の攻撃力防御力が高くなった程度で、特別な動きをするやつもほとんどいなかった。唯一空から襲ってくるモンスターが増えたので、それに最初はほんろうされた俺たちだったが、攻撃してくる時にカウンターの一撃で倒せることが発覚し、最初はアーチャーに変身して迎撃していたが、攻撃してくるまで無視することに方針転換をした。敵モンスターの対策ができてしまえば、ダンジョンの攻略などたやすいもので、俺たちはずんずん奥へと進んでいく。

「ガンちゃん。どうやって避けてるんだ？」

「敵が下段攻撃をしてきたらジャンプ突きして上段攻撃をしてきたらしゃがみ下段をしてるだけだぜ。中段の攻撃力の低くて一番トロイ攻撃が来た時は一歩下がるか薙ぎ払いだな。」

「なるほど、理屈だけ聞けばできなくもなさそうだな。とくにヘビーウォーリアーの俺はすべて相手の攻撃に防御すればいいだけだし、結構さっくりできそうだ。」

「そうだな。要は遠くから攻撃してる割にダメージ受け過ぎだぞ。」

「仕方ないだろ。攻撃特化のランサと違ってアーチャーは攻撃力低いから懐に入られたらなかなか倒せないんだ。」

俺が倒し損ねた敵を二人がさばいていくという方針のもと進んでいるのだが、二人にも結構ダメージが見られる。そうはいっても二人のダメージは俺が拾わなかった薬草などで十分に回復できる範囲だが。

っと、そんなことを思っていたらまた敵が出てきたぜ、俺は今までに出てきたことがない愛らしい兎のモンスターに攻撃をしかけようとＬＶ２ダンジョンに来てから思いついたダッシュ下段（スライディング）を決めようとしたところで幹久から待ったの声がかかった。

「こいつは敵じゃねえ。確か野兎とかいう仲間になるモンスターだ。」

「野兎？確かに攻撃してこねぇけど、こんな奴どうするんだよ？」

「ガンちゃん大量に薬草もってるだろ？そいつをその野兎に与えてみな。」

俺はカバンの中を確認したら本当に大量の薬草が入っていた。ＬＶ１ダンジョンを終わった時に３０個ほどだった薬草はＬＶ２ダンジョンでＬＡも取るようになってなんと１００個近くまで増えていた。

「いつの間にか１００個も薬草があんじゃん。いいぜ、ほれ食えよ。」

要と幹久がそんなに薬草を持ってやがったのかと文句を垂れてきたが、先ほどの街で補充していた二人もそれと同じくらいもっているだろう。まぁダメージを受けないで進んでいる俺は増えることはあっても減ることはないので持っていても仕方がない気もするのだが。

「キュピー！！」

薬草を与えると野兎は嬉しそうに俺たち三人の周りを駆け出した。

「こいつの効果はすげぇぜ。自動でＰＴ内の一番体力が少なくなっている人を感知して癒す効果があるんだ。人数分野兎がいればそのＰＴメンバー全員にライフ回復を自動でしてくれるというすぐれものだぜ。」

「んじゃ薬草いらねぇじゃん。」

「いや、薬草の効果と比べると各段にそのライフ回復量は落ちるからな。どうしても薬草を併用する必要があるんだが、それでも今の俺たちなら１０個に一個分くらいは薬草を使う頻度を減らせるんじゃないかな？」

「なるほどね。薬草一個で今後ずっとＨＰ回復してくれるんだったらもうけものじゃねぇか。」

「そういうことだ。こいつはＬＶ２ダンジョンに一匹しか出てこないから全員が死んでＰＴ崩壊したらもう一度ＬＶ２ダンジョンに行く必要があるって攻略サイトに乗ってたぜ。」

幹久の説明は自分で体験したことじゃないようだが、いつもそういった情報は事前に自分で分析し、確かな情報かどうかも考えて来るので、自信を持っていっているのだから間違いはないだろう。

「なるほどね。じゃあ上級者もＬＶ２ダンジョンには何度も行く必要があるってわけだ。」

「そういうこと、ついでに切れ味もプラス2していけば、次のダンジョンが楽になるしな。」

「じゃあ、後ろの心配はなくなったし、今まで以上にガンガン進むとするか。」

今までどうしても薬草を使うためのタイムラグが生じていた二人が楽になるのであれば、今後もっと楽に動くことができるだろう。ＰＴの安心感は俺の動きをより鋭いものにかえてくれるはずだ。

「おう。一番ダメージを受けていた要がこれでライフの心配がなくなったからな。」

「幹久だって、薬草かなり使ってたじゃないか。残り少ないんじゃないか？」

「後衛の要よりもアイテムを拾える確率が高いから今度からはお前の分にわざと拾わなかった薬草を拾うことにさせてもらうぜ。」

「ついでだ。今俺が持ってる薬草は全部渡してやるよ。中堅の幹久が死んだらＬＶ２ダンジョン攻略がきつくなりそうだからな。」

先ほどカバンを確認して大量に持っていた薬草、使い方だけ聞いて使わないのはもったいない気もするが、より多く使ってくれる奴に渡した方がいいだろう。ベルトに入ってる分は取りだす方法が解らなかったのでそのままに、残りを幹久に渡してしまう。

「サンキュお前は俺たちに構わずガンガンＬＡとってくれよ。」

こうして新しい仲間も増え、戦略的な幅が広がったことにより、俺

たちのＬＶ２ダンジョンの攻略は一層楽になった。野兎はダンジョンのかなり奥の方に出てくるらしくすぐにＬＶ２のボスになったが、俺も５つほど薬草があったのでそれを使ってなんとかＬＶ２のボスは誰も死なずに倒すことに成功した。

「お前ありえねぇな。途中まで火を噴くなんてありえねえとか言ってたくせに結局その火までサイドステップで避けて最後の方はノーダメージだったんじゃねぇか？」

「ああ、攻撃のパターンをつかむまではどうしてもダメージくらっちまうが、今なら一人でもＬＶ２ダンジョンなら攻略できそうだぜ。」

「ソロ狩りなんてこのゲームはお勧めしてねぇっつの。まぁ本来四人ギリギリで進むはずのところを三人でクリアしてる時点でやばいんだけどな。」

「でも、ＬＶ２くらいまでは一応初心者歓迎ダンジョンでしょ？この前ソロで突破したってやつのブログを読んだよ。まぁＬＶ１ダンジョンを何度も行って切れ味を２０にしたマジックランスで、だけどね。マジックランスはライフ回復の効果があるから行けたんだろうね。」

「ちょま、ライフ回復効果ってなんだよ。俺そんなの初耳だぞ？」

何も知らない俺は、こうして幹久と要の会話からヒントを得ながら冒険をしている。ダンジョン内にいる時も、俺は黙々と敵を倒しながらそれでも耳だけは二人の会話にも傾けることで、おおよそこのゲームがどんな感じのものか解ってきた。

「二段階の武器にはそれぞれ元々の追加効果がついてるんだよ。まぁ鍛冶屋でどんな追加効果も付けられるスタンダード系の武器の方が良いに決まってはいるんだけど、追加効果がつけられるまでは二段階の武器はつよいよ。」

「なるほどね。とりあえず、手に入れたお金で鍛冶屋に行くか。先にアイテム屋でもいいけどよ。」

「鍛冶屋が先だな。鍛冶屋で武器を鍛えることがこのゲームの最短クリア方法だからな。お金が足りなくてアイテムが買えない場合はもう一度ＬＶ２ダンジョンに行って強くなった武器でお金を貯めて鍛冶屋に行ってもお金が余る状態になるようにするのがコツだ。」自信満々に言い放つ幹久に俺はそれも自分で出した答えじゃないことを指摘する。

「それもサイトの受け売りか？」

「まぁな。とはいっても、上級者と呼ばれてる人でも今までＬＶ５ダンジョン以上をクリアした人はいないから俺たちが持っている情報もそのうち尽きるかもしれないがな。」

幹久の言葉に疑問が浮かぶ、こいつらが前にゲームをしたと言っていたのは確か１周間くらい前だったはずだ、ゲームができた当初は４人でするゲームを２人で並ぶというのに抵抗があったためあまり積極的に参加せず、さらに二人では中々難しいので俺を誘ったんだとかなんとかってのを俺は聞いていた。

「このゲームってもう一カ月以上前からあるんじゃねぇのか？それでもＬＶ１０最上階ダンジョンに行った奴がいないのか？」

「ああ、それだけ難易度が高いのと、コンテニューにかかるお金が高いゲームだからな。ＬＶ２ダンジョンまで１０００円で来れたなんて奇跡みたいなもんだぜ。」

「そうだったのか。まぁ俺は５００円だがな。お前らのおごりでクリアさせてもらって悪いね。」

「くっそう。やっぱりこいつにはもう少し難易度の高いダンジョンに連れて行って己の不甲斐無さを実感してもらう必要があるな。鍛冶屋に行ってアイテム補充できるだけ補充したらＬＶ３ダンジョンに行くぞ。」

「おいおい、良いのかよ？１００万円しかないんじゃないのか？」

「バカ言え、お前と違って道々アイテムやお金を拾ってきたんだ。ボスのクリア報酬だけのお前と一緒にするな。」

「マジか？おまえいくら持ってるの？」

「不要なアイテムを所持した状態で１２０万ほどだな。被ってる武器とかを売れば３００万円ほどになる予定だ。」

幹久の発言に驚き、要も同じような状態か確認する。

「まさか要もか？」

「ああ、さっきマジックランスが二本落ちたからな。そういえばお前まだスタンダードランスのままだろ？一本やるよ。」

要の好意はそのまま受け取っておく、先ほど聞いた話によると、武

器の威力だけでなく、特殊な効果もつくらしいマジックランスという武器に装備を交換すると、その槍は今まで使っていたシンプルな手に馴染むような槍とは違い、ちょっとゴテゴテとしった装飾がついている物だった。

「お、サンキュー。それはいいんだけどやっぱりお前も２００万くらい行くのか？」

「俺はそんなに行かないが、さっきよりも薬草が残ってるからそれほどお金を使わなくてもいいはずだぜ。」

三人で鍛冶屋に着くと、切れ味のプラスが2になっていたが、その代わり値段も跳ね上がっていた。

「おいおい、切れ味プラス2で４０万は異常だろ。」

「ってことはＬＶ３クリアの値段は９００万もするってことか？」

ＬＶ１のダンジョンをクリアした後に切れ味を上げた時に１万円だったことを考慮すると、０が一つ増えて2倍になっている。その次は６００万かもしくは９００万かと考えて、あえて大きい数字の方を口に出してみた。しかし、それは簡単に否定される。

「いや、おそらくそれはない。ＬＶ１ダンジョンは完全なる初心者用だから１万と破格に安かっただけで次からは９０万・１６０万となっていくはずだ。」

「それでも高いっつの。まぁ何とか俺が持ってるランスは両方切れ味プラスできるけど、これだとスタンダードボウの切れ味は上げられないな。」

「いや、ここは俺がスタンダードソードを一つお前にやるからこれを売って切れ味を上げておけ、直接お金を渡せないのは面倒だが、こうしてアイテムを使ってお金を貸すことができるのは良いな。」

「確かにそうかもしれんな。とにかく、切れ味はできる限り上げた方がいいから今は幹久の助言を受け入れておけ。実際ガンちゃんがさっきさらっと渡した薬草の分のお金の方が高いんだしな。」

「そっか、なら遠慮なくいただくとするぜ。悪いな。」

「いいってことよ。ＬＶ１すらクリアが困難だと思っていたのが操作に慣れてきたとはいえＬＶ２までクリアしちまったんだこれくらいなんてことないぜ。」

こうして俺たちは切れ味をプラスして、要と幹久はまた大量の薬草を買いこんで次のＬＶ３ダンジョンに進むことになった。

？

武器情報【2】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋３
基本攻撃力１８（追加効果無し）
マジックランス＋２
基本攻撃力２７（攻撃時１＋ダメージの１％をライフ回復）
スタンダードボウ＋３
基本攻撃４（追加効果無し）

カナメンさん
スタンダードランス＋３
基本攻撃力１８（追加効果無し）
マジックランス＋２
基本攻撃力２３（攻撃時１＋ダメージの１％をライフ回復）
スタンダードボウ＋３
基本攻撃４（追加効果無し）

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋３
基本攻撃力１３（追加効果無し）
ロングソード＋２
基本攻撃力２２（切れ味プラス最大値２０）
攻撃時斬撃が伸びて敵に効率よくダメージを与えられる
スタンダードメイス＋３
基本攻撃力１０（追加効果無し）
ヘビーメイス＋２
基本攻撃力１７（時々クリティカルヒットが発生・ダメージが二倍

に

LV3

「くそ、正直これじゃ俺たち薬草がなくなっちまうぞ。」

「ＬＶ３に来る前にもう一度ＬＶ２ダンジョンにいって野兎をもう一匹仲間にして切れ味を上げておけばよかったな。」

「いまさら遅いわ。」

要と幹久の発言通り俺たちはＬＶ３ダンジョンをなめていたらしくかなりの苦戦を強いられている。というのも、モンスターは結局そこまで変化なかったのだが、防御力と攻撃力が半端なく上がっていたのだ。切れ味がそれほど＋されていない今の武器では第二段階の武器をもってしても二回攻撃しなくては敵を倒すことができず、さらに敵の攻撃はＬＶ１のボスより少し弱い程度のダメージに跳ね上がっており、野兎が二人の間を駆け回っているのにも関わらず攻撃を全く受けない俺とは違い徐々に削られていく二人は薬草を頻繁に使うしかなかった。

「せめて俺の攻撃に一撃で死んでくれたらお前らが野兎の効果で回復する時間を稼げるんだがな。」

「それこそ今さら遅いわ。とはいってもおそらくギリギリＨＰが残っているくらいだとは思うがな。お前の攻撃の後に俺のスタンダードボウの矢で一撃ということは切れ味が最高でもあと４上がれば一撃で倒せることになるんだからな。」

なるほど、後衛から攻撃できる代わりに極端に攻撃力の低いアーチ

ャーの攻撃はそうやってあとどれだけ切れ味を上げればいいのかを解り易くしてくれる特徴があったのか。

「じゃあさ。悪いんだけどさっき拾った切れ味プラスの全くない弓で攻撃すれば切れ味があと幾つ必要なのかわかるんじゃねぇか？」

「さすが幹久。しかしそれは僕に死ねって言ってるようなもんだよ？」

「どうせこのままじゃガンちゃん以外薬草が尽きて死ぬんだ。死して屍だ。」

「了解、ホンジャマ挑戦してみるかね。」

俺の攻撃の後に要が切れ味プラスのついていないスタンダードボウで攻撃をしたが一撃では倒せず、二回攻撃で死んだ。ということは、もう一回ＬＶ２ダンジョンに行っていればかなり楽にクリアできたということだ。普通の人は切れ味をもっと上げてからダンジョン攻略に臨むことからも、俺たちの行動が異常だったのだろう。

「くそう。ＬＶ２が楽にクリアできて、しかも野兎まで手に入れたことに安心しきってたぜ。」

「さて、そろそろ俺たちは薬草の消費が明らかに回復に追いつかなくなってきたしここらであきらめて散るとするぜ。がんちゃん。お前は野兎とマジックランスの効果で十分ダメージよりも回復の方が多いみたいだから、このまま進め。ついでにノーコンテニューで行けるところまで行けよ。もちろん鍛冶屋で切れ味を上げるのもわすれるんじゃねぇぞ。」

「幹久。まじか？俺を一人置いて行くつもりか！」

中堅を守っていた幹久が倒れると、アーチャーではすぐ死んでしまうということもあってランサーにジョブチェンジをしてマジックランスで何とか対抗しようとした要もついに力尽きてＬＶ３ダンジョンの後半といった場所で俺一人置き去りにされてしまった。

「ちくしょう。お前ら覚えていろよ。」

そうは言ったものの、今ですら薬草とマジックランスで消費＜薬草獲得だった俺は野兎の効果で獲得の方が上回り、時間はかなり必要となったが、ＬＶ３ダンジョンを攻略してしまった。

現実世界B

「幹久、ガンちゃん早く帰ってこないかな？」

「さぁなぁ。ノーコンテニューで低ＬＶダンジョンに籠ると流石に待ち続けてるほかの客に迷惑だと思って次のダンジョンに進めって言ったけど、普通に進めてるじゃん。」

こういったゲームはコックピット内に侵入するのは財布などのスリなどの恐れもあるためにプレイ画面だけが外から見られるようになっている。これでマナー違反の操作者がいた場合は強制的にゲームセンターのスタッフにより排除されるのだが、画面を見ている限りソロで敵を倒すことに時間がかかり過ぎるということを除いては何も悪いことをしていない。

ＬＶ３ダンジョンをクリアした時はもろ手を上げて喜んだ二人だったが、ＬＶ４ダンジョン攻略に１時間近くかかりしかもクリアしてしまい、ＬＶ５ダンジョンに鍛冶屋以外に行かないで挑む様子をみてあきれるのだった。

「そろそろ帰ってくるね。でも、ＬＶ３とＬＶ４ではアイテムを回収するようになったから、かなりお金持ちになって帰ってくるよ。」

「くそう。絶対に俺たちの方が先行してガンちゃんの悔しがる顔が見えると思っていたのに、これじゃあ計画がおじゃんだぜ。」

「まぁいいじゃん。これでガンちゃんもゲームが好きになってくれたら、またこのゲームしに来れるんだからさ。」

「なるほど、俺たちはガンちゃんにゲームをはまらせるためにわざと負けたと言えるわけだな。」

「本当に？」

「う・・・リアルでガンちゃんの操作に負けた気がするぜ。奴は体感型ゲームのスペシャリストか？」

そうなのだ、岩倉翼の操作技術は二人が感嘆するような素晴らしいものだった。立体的な世界観というのに重点を置いたゲームの操作はそれほどコマンドが多い訳ではない。しかし、先ほどから踊るようにして戦っている岩倉翼の槍さばきを見るに、通常自分たちが行える攻撃よりもずっと強い攻撃力で、相手の動きに呼吸を合わせるかのように避けまくる動き、自分たちでは決してマネのできない芸当だった。

「いやいや、確実に始めてって感じだったよ。」

「「はぁ・・・」」

自称だけでなく他称でもゲームオタクと言われてそれなりにゲームに関しては自信のあった二人だった。実際、普通の人と比べたら前回二人で潜ったの一回と今回の二回さらに認証カード代のたったの１８００円でこれほど操作ができるようになったのはすご腕といってもおかしくないのだが、岩倉翼の体感型ゲームに対する操作スキルのすごさに、今日何度目かの溜息が洩れるのだった。

「なんじゃこりゃぁぁぁ！！」

「帰って来た？」

幹久は翼が入っていたゲーム機から奇声と共にゲームを終えたことに気づく。

「ガンちゃん？終わったの？」

「ちょ、ちょっと待ってくれ、今すぐ出たい気持ちは山々なんだが、悪いが上着を貸してくれないか？」

「は？何をいってるんだ？」

ゲーム機の中で、何やら良くわからないことを叫び出した友人に疑問を浮かべるが、それ以上になにかが起きてしまったらしく、慌てまくりの様子にとにかく落ち着くように話しかける二人だが、上着を貸せの一点張りだった。

「いいから少し隙間を空けるから上着を貸してくれ。」

「嫌だよ。今日は外めっちゃくちゃ寒いんだぜ？」

「それ以上に恐ろしいことになってるんだとにかく貸してくれ。」

「幹久、別に今すぐゲーセンから出るわけでもあるまいし貸してあげなよ。」

「ああ、別に良いけどさ。」

幹久は了承すると、翼は小さく隙間をあけてさっと幹久の上着を取るとゴソゴソと中で音がする。

「悪い。要、お前の上着も貸してくれるか？こっちはすぐに返せると思うけどさ。」

「別にかまわないけど、事情だけでも言ってよ。まさか体感型だったためにゲームに夢中になって服が破れてたとかそんなの？」

「いや、それだったらまだ良いんだが、とにかく後で説明するから今は貸してくれ。」

「ヘイヘイ。」

要は先ほどと同じように隙間から上着を貸すと今度はすぐに翼が出てきた。

「は？おまえひょっとして、破れ過ぎて全裸？」

先ほど幹久が渡した上着を着ているが、それ以外にはぱっと見た感じ何もつけていないように見える。幹久の上着は偶然大きなサイズの物だったためすっぽり隠れてしまっているだけかもしれないが、それにしても先ほどゲームセンターに入った時は履いていたはずのズボンまでないのはおかしい。

「どあほう、ここじゃまずいからトイレに来てくれ、そこで詳しく話す。」

そのあと三人は奇妙な翼に連れられてトイレへと駆け込んだ。

「おいおいどうなってるんだ。ちゃんと一から説明しろよ。」

「まずはこの俺の姿を見てくれ。」

そう言って先ほど借りた幹久の上着を脱いで見せさらに要の上着で隠したものを手にもった。

「ちょま、いつの間にそんな・・・コスプレ？」

「コスプレ言うな。俺だって何でこんな格好になってんのか、わからねぇよ。」

「ガンちゃんに解らないのに俺らがわかるわけないわな。そんで、武器まで用意するとは、それって最後に装備してた貫通の弓だろ？」

「ああ、鍛冶屋で武器に貫通効果をつけれるってなってたんだが意味が分からなかったから、お前らに聞いてからつけようと思ったら、敵が貫通無しではダメージを受けないようになっちまったからな。

ってそんなことは良いんだよ。」

「ああ、ついでに言うならＬＶ３クリア後の範囲増大もできればつけておいた方がよかったぞ。」

「マジか、ついつい、いつもの癖で守銭奴主義に走っちまったぜ。」

「いや、幹久今はそんなことどうでもいいよ。なんでガンちゃんがコスプレしてるかの方が大事じゃない。」

「そうだったな。ってか見たまんまゲームのキャラの格好だよな。」

そうなのだ、俺の姿はまさに、先ほどリアルダンジョンの世界にて来ていたランサー＆アーチャーの服装にそっくりなのだ。しかも、二人のせいで女性キャラになってしまっているので、やけに露出が多いという物凄く悲しい状況になっている。

「うるせぇ、というかゲーム中からなんかおかしいと思ってたんだ。さっき上着を借りるまでずっとゲーム機の中にいたんだが、わけのわからんペダルやらハンドルやらがあったんだが、ひょっとしてあれでみんな操作してるのか？」

「あ？体感型っていってもアニメや漫画じゃないんだから、ゲームの世界に本当に入るわけじゃないんだから当然だろ？ゴーグルの影響で視界はほとんどゲームの中とはいえ、ペダル踏まなきゃ走らねぇし、ボタン押さなきゃ攻撃しないんだからな。」

「やっぱりか、お前らがどうやって操作してたか教えてくれるか？」

「ん？おまえだってうまく操作してたじゃないか。左のペダルを踏

むと歩く、強く踏めば走るが上に黄色いゲージがあってゲージがなくなると走れないわな。右のペダルは、俺のキャラは盾を構えて防御だったがお前ら二人はジャンプだっただろ？ハンドルの右ボタンはアクションコマンドで左はジョブチェンジ、途中からお前が得意だったスライディングはハンドルを押しこんでしゃがむ動作とダッシュを合わせたかなり高等テクニックだとおもうぞ？」

「解ったよ。俺がゲームをしていると思っていた時とお前らがゲームをしていた時の決定的な違いがな。」

「ん？どういうことだ？」

俺は二人に聞いたゲームの操作方法などから、自分の体験したことの差異点をかんがみて、結論を述べる。

「俺はそんなまどろっこしい操作ができるほどゲームはできねぇ。つかさっきの話を聞く限りじゃダッシュジャンプすらできるがどうか怪しいな。」

「おまえ、両足踏み込むだけじゃん。俺だってシールドタックルがそれでできるようになったのは結構大変だったが、お前なんてＬＶ１ダンジョンの最初の方にできるようになったじゃねぇか。」

しかし、普通に考えるとあり得ない話しなので、幹久にも要にも理解してもらえない。というか、俺も整理がついていないので、どこから説明していいのか解らず、とにかく自分に起こったことをこと細かに説明していく。

「ああ、だから違うんだ。俺は体感型ゲームってのは自分の体を動かしてその動きがそのままキャラクターの動きになるんだと思って

たからな。というか、目線もキャラクターと同じだったことも考えると、カバンなどを除いて全部ゲームの中に入っちまってたらしい。」

「バカ言わないでよ。幹久くらいしかそこまでありえない嘘はつかないよ？」

「まてまて、俺だったら言いそうってことかよ？」

「いや、ガンちゃんに無理やりゲームさせる説得をするときそれっぽいことといってなかったっけ？」

「あ？言ったかもしれんがあれはちょっとした冗談で・・・」

実際に言っていた。俺は幹久が冗談で言った言葉を信じてゲームを始めていたため、さらにゲームというものに余りなじみの無い普段の生活の影響もあって、何の疑問も浮かばずに先ほどまでゲームの世界の中にいたらしいことを言葉にする。

「冗談が本当になっちまったらしいぜ。」

「ま、マジか。羨ましい。」

「いやいや、普段から格闘技をやって体を鍛えてたガンちゃんだから本当にゲームの中に入ってもあれだけ動けたんでしょ？僕らみたいなもやしが入ってもむしろダッシュ距離やジャンプ力が下がって今より弱くなるんじゃない？」

「要、それを言わないでくれ、本当にゲームの世界に入れるんだったら俺だって今から体鍛えるっつの。」

二人とも俺がゲームの世界に入ったことに関してはようやく理解をしめしてくれるようになってきた。己の身に起こったことなのだから、要や幹久にも起こるかもしれないとかなり真剣な表情で諭す。

「鍛えてみたら？現にこうして俺がゲームの中にはいっちまったんだからさ。」

「いやいや、どう考えても特殊な状況だから。」

「しっかし、そうなるとリアルダンジョンって本当にリアルなダンジョンだったんだろ？どんな感じだったんだ？」

「結構えぐかったぞ。格闘技してて血は見慣れてるとはいえ、モンスターはきもかったからな。まぁそんなことに気づいたのは本当にゲームの世界に入っていたかもしれないって気づいたゲーム終了後だけどな。」

「まぁそりゃそうだ。それよりもこの衣装すげーな。ってモノホンの鎧じゃねぇのか？」

「本当だね。女性キャラだから露出度は高いけど、このショルダーパットとか鉄でてきてるじゃん。結構重いんじゃない？」

「ああ、俺みたいに鍛えてる人間じゃなきゃ結構きついだろうな。ってかあんまジロジロみるなよ気色悪い。」

実際に肩を覆う鉄の武具であったり、それ以外にもかなり重たい防具なんかが着けられているが、要が言ったとおり、他のキャラと比べて露出が多いキャラだったため、それほど重たいということもな

く、それ以上に二人の観察するような視線の方が痛々しい。

「俺たちだってお前の体になんて興味ねぇよ。しっかしすげえな。ん？これってゲーム内のカバンだろ？中身何が入ってるんだ？」

「ホントだ。」

翼はカバンの中身を確認しようと開くと、そこには札束が大量に入っていた。

「おま、これってゲーム内の金なんじゃね？おまえいくらくらいもってたんよ？」

「確か鍛冶屋で鍛えた時にずいぶん少なくなっちまったから、３００万くらいにはなってたはずだけど、ゲーム内じゃはしたがねでもリアル世界じゃこれってかなりの高額だよな？」

「あほか、高額なんて次元じゃねえだろ。お前のバイト代の何倍って話だろ。」

「月１０万から１５万だぜ。最大の１５と考えても２０倍だな。」

「そんなに稼いでるのに貧乏人だったのか、難儀だな。」

貧乏貧乏うるさい。たしかに俺は貧乏さ。それだけ稼いでも、親からの仕送りなんて全くない俺は生活費等を差し引くと遊びに使える金はほとんどない。

「うるせぇ、これでも毎月１万くらいは貯金できてるんだぜ。」

「よかったな。これで生活が楽になるじゃないか。」

「それはないだろ。幹久ももう少し考えて発言してよ。ガンちゃんが持っているお金はあくまでゲーム内の金なんだから、モノホンなわけないじゃん？」

「そうだよな。これがモノホンだったらなぁ・・・」

翼たちはそうしてそのお金について話していたが、一時間以上もゲームをしていた翼は用をたしたくなってしまった。といっても本物の鎧などつけたことがなかった翼はとりあえずやけに露出の高い鎧の腰の部分を緩めなんとか事なきを得ようと試みたのだが、腰のフォックを外したとたん閃光と共に腰どころか全てが消えてしまい、弓も防具も無くなってしまった。

「ちっさ・・・」

「うるせい。って小さい？そんなはずは・・・」

三人は一緒に銭湯など風呂も入ったこともある仲なので今さら恥ずかしがる必要はないのだが、トイレという公共の場で全裸になってしまった羞恥心から前を隠す翼だった。

と、そこに。

「き、君たち何をしてるんだ！」

「「「え？」」」

悪いことというのは突然訪れるもので、全裸の翼、要の手には先ほど預かった３００万もの大金、翼の体をしげしげと見つめる幹久と

なってはどう言い逃れすることもできない。
すぐにその客がゲームセンターのスタッフの人を呼びに行き。ギリギリだった翼は用をたしている間にスタッフの人たちに御用となり、何をしていたのか詳しく事情を説明するように言われるも、本当のことなど言えるはずもない三人はただひたすら謝り、今後一切のゲームセンターの立ち入りを禁止されて釈放となったのだった。

「いやぁ全科つかなくて良かったな。」

「やけに仲がいい友人が実は男娼だったなんて洒落にならんぜ。」

「ありえねぇっつの。あんな解らずやのスタッフがいるゲーセンなんて二度と行かねえっつの。」

俺と幹久はさきほど俺たちのことを拘束し、嫌味タラタラに説教なんてしてきたゲームセンターの店員の悪口を言いまくる。

「あのなぁ、ガンちゃんも幹久も明らかに悪いのは俺たちだろ？ゲーセンの店員は状況をみたらそう判断するしかなかったんじゃね？」

「それよりさ。この金どうするよ？」

あのお金を店員に調べられたら偽札使用で訴えられると思っていた三人だったが、そんなことにはならず、両替機もきちんと通るれっきとしたお金だとわかった三人だったが３００万のうちの一割をよこせと幹久と要に分捕られてしまった。

「まずは服を買いに行かなきゃな。」

「いいじゃねぇかスウェットで、せっかく俺が買ってきてやったん

だからさ。」

全裸で帰ることはできなかったので、ゲームセンターの隣にあった服屋でスウェットを幹久が買ってきた。しかし、パンツとスウェットだけではこの寒空の中歩くのは困難だと言って結局まず服を見に行き。３００万もあるのでそれぞれ適当な服を新しく購入してそのあとは三人で近くのステーキハウスへと向かった。普段は外食などお金の無駄と行かない翼も今日ばかりはと美味しいステーキにご機嫌となるのだった。

？

武器情報【3】

プレイヤー
ガンちゃんさん
スタンダードランス＋１０
基本攻撃力２５（追加効果無し）
マジックランス＋９
基本攻撃力３４（攻撃時１＋ダメージの１％をライフ回復）
スタンダードボウ＋１０
基本攻撃力１１（追加効果無し）
ピアッシングボウ＋７
基本攻撃力１５（硬い装甲も突き抜けて攻撃一直線上にいる敵にダメージ）

要&幹久の武器はＬＶ３ダンジョンにて敗退したため記載を省かせていただきます。

その他詳しいことはあまりゲームという物に馴染みが無いため解りませんが、こんな風に成長しているんだと理解して頂けたらと思います。

現実世界C

あの全裸事件から一か月ほど経った。俺は相変わらずのバイトと大学の生活を送っていたのだが、３００万のおかげで今までよりもずっと楽な生活送っていた。結局あのあとも遊んで使い果たしてしまった幹久と要と違い俺は貯金したので、貯金ができ、今まで一杯一杯だった生活に余裕ができたのだ。

「なぁ、ガンちゃん。またゲームセンターに行ってリアルダンジョンしようぜ。ひょっとしたらまた前みたいにお金が手に入るかもしれないんだぜ？」

「だから、前に電車で隣町までいってゲームセンターに入ってプレイしてみたけどダメだったじゃないか。」

そうなのだ。あれ以来味をしめた二人にこうして何度も誘われている俺なのだ。そして確かにあれほど楽にお金が稼げるならと俺も立ち入り禁止になった近くのゲームセンターではなく隣町のゲームセンターまでわざわざ出向いて５００円を入れたのだが、あれ以来本当のゲームの世界に入ることはなく、ゲームのできない俺はあっさりと死んでしまいそれ以来行っていない。

「偶然ゲームの世界に入れ無かっただけかもしれないだろ？ね、今度一緒にいってくれたら次はあきらめるから、っていうか、そろそろ普通にプレイしても二人で攻略するのはきついんだってお願いだよぉ。」

「は？お前らまだあのゲームやってたのか？」

発売から二か月もたちプレイヤーの中には難易度の高すぎる設定に嫌気がさして離れて行ったものも多い中、幹久と要はまだ続けているらしい。まぁ、この会話は何度もしてきたので、実際に二人がゲームを続けてきたことは知っているのだが、お約束というものは存在するわけで、俺は毎回この言葉を言いながら、二人からのゲームへの勧誘を断り続けている。

「前にガンちゃんのカードが原因かもしれないって借りてプレイしたこともあるから、ガンちゃんのキャラも武器の切れ味全部２０まで上がってるからさ。お願いだって。」

「切れ味２０って確かお前ら二人じゃＬＶ２ダンジョンまでしか攻略できないって言ってなかったか？」

以前幹久と要から、どうしてもと言われてカードを貸し出していたのだが、その時もなんの変化もなかったと言っていた。あの時に何度も何度もコンテニューして武器の能力を上げていたらしい。

「流石にＬＶ３ダンジョンは攻略できるようになったぜ。それに、いつも二人ってわけでもないし、野良ＰＴさそって偶然四人組になった時なんてＬＶ５もクリアしちまったぜ。」

「なるほどな。幹久のゲーム熱は解ったが、俺はあの３００万だって偶然手に入れたお金で十分生活が楽になったんだ。これ以上は望まないぜ。」

「でもでも、ＬＶ５ダンジョンのクリア報酬１０００万だよ？二段階までの武器を全部鍛冶屋にしても余るほどの報酬が入る設定になってるんだってさ。ＬＶ６をクリアしたらもっと儲かるかもしれないし、さらに第二段階の武器はこれ以上切れ味を上げることができ

ないんだから鍛冶屋代は浮くはずだぜ。」

「はいはい。ゲーム脳ゲーム脳。結局それだけ稼いでも現実の金は増えないんだから意味ないだろ。」

本来から言えば俺の発言はおかしくないはずだ。しかし、そこを何故かゲームの中に入った為に３００万円もの大金を手にしていた俺が言ってしまうとあまりにも説得力が無い。そんな互いの空気が伝わったのか、幹久はまだ食い下がろうとはしない。

「だからガンちゃんに来てほしいんだよ。ガンちゃんだったらひょっとしたら成功するかもしれないだろ？今回は俺と要が着替えちゃんと持って行くからさ。」

「解った。だが俺は隣町まで行くのが面倒だからやめておく。」

「じゃあ、近くのゲーセンならいいの？」

「まぁそうだな。ゲームの世界に入る云々というよりもお前らに付き合って一回くらいゲームしてやってもいいぜ。」

高飛車なセリフだが、こんな会話は幼馴染であり、悪友としての互いの信頼があるため、冗談の範囲内だ。幹久もそのあたりはあまり気にしていないらしく、それよりも重要な内容があったため、軽くスルーして自らが持ってきた情報を話しだす。

「サンキューじゃあ、駅前に新しくできたゲームセンターにリアルダンジョンが導入されてるから行こう。」

「なにぃ。いつの間にそんなもんができたんだ。」

「ガンちゃんは原付持ってるのに行動範囲狭すぎだよ。道場と学校とバイト先以外行ってないの？」

「自炊のためにスーパーにも言ってるぞ。」

「結局それ以外行ってないんじゃないか。そんなことでは大学生活が灰色になってしまう。さぁいざ駅前のゲーセンへ。」

ゲームセンターに行ったところで、俺がこの一か月で移動した場所にゲームセンター一回が増えるだけで何にも灰色の生活から抜け出していないような気がしたが、そこはつっこまないでおこう。高校こそ違ったが大学で偶然一緒になったこいつらとは腐れ縁、たまにこうして遊びの誘いにのること自体は悪い気はしない。

「おお、本当にガンちゃんが来たよ。どうやって誘ったんだ？」

「俺の説得スキルをなめるなよ。最後なんてどうか一緒に行かせてくださいと拝み倒される始末だ。」

「幹久、妄想もたいがいにしろよ。リアルダンジョンに本当に入れるかなんてわかんねぇけど、近くにゲーセンができたから一緒に来てって言われたからな。たまにお前らと遊ぶのに理由なんていらないんだけどな。」

「確かにそうだね。今回もしリアルダンジョンの中に入れなくっても楽しんじゃおう。」

「要もなかなか良いこと言うじゃねぇか。」

「ふふん。僕はいつだって正義の味方だからな。」

要は昔から、ヒーローとか勇者なんて言葉が大好きな奴だった。本人は物腰柔らかそうな対応の中に黒い発言をガンガン入れて来るというどちらかというと、影の支配者とか、悪代官的なキャラクターなのだが、それはコンプレックスの裏返しなのかもしれない。

「すまん。さっきの発言はなかったことにしてくれ。」

「うそぉん。そんなこと言わないで、早くリアルダンジョンしようよ。楽しみにしてたんだからさ。僕たちの操作テクニックの上達に驚くんじゃないぞ？」

「俺は相変わらずゲームはできねぇから、アーチャーにでもなって後方支援といきますかな。」

「そうだね。ゲームの中に入れ無かったらそうしてもらうよ。」

幹久はまだゲーム内に入れる云々と俺らに言い募ってきたが、とりあえず、二か月もたって参加人数が減ったらしいリアルダンジョンには順番待ち一回で三人揃って行けることになった。

？

勇者と妖精α

ピーピーピピピピッピ！

「認証番号一致、リアルダンジョンにようこそ。あなたの名前はガンちゃんさんですね？今からリアルダンジョン始まり都市、セイラへ転送いたします。」

以前も聞いたナレーションを聞いて今回も始まるのかと思いきや、なんだかあたりが暗くなり、いきなり変な小さな虫が襲ってきた。

「俺様をいきなり襲おうとはふてぇ虫だ。」

「ちょ、ちょっとまつぴ。うちは敵じゃないぴ。」

「お？話せるのか？中々面白い虫じゃねぇか。敵じゃないんだったらなんだっつうんだよ？」

そういえば、虫は光に寄ってくるなんて言うが、真っ暗な世界にほんわかこの虫の周りだけ明るい気がする。羽はトンボとかそんなのに良く似ているが、虫の体があるはずの部分は人間を手のひらよりさらに小さくしたようなこじんまりとした人型が見える。

「あなた本当に伝説の勇者っぴ？こんなに可愛い顔してるのに言葉づかいも男っぽいぴ。」

「ギャーギャーピーピーうるせえな。一体お前はなんなんだよ？」

「うちは妖精のピルルだっぴ。勇者様の案内をするのが仕事っぴ」

自称妖精のピルルは、小さな体のさらに小さな胸を張ると、どうだ、すごいかとばかりに俺に自己紹介をした。

「ほう、俺がリアルダンジョンをしてない間に新しい機能でも着いたのか？」

「本当に勇者様にしかうちは見えないっぴ。こうして会話をしているということはあなたが勇者様だっぴ。」

「はいはい。それで俺は何をしたらいいんだ？」

「ＬＶ３以上のボスを退治して欲しいっぴ。最近プレイヤーが減ってボスの力の方が強くなってモンスターがあふれ出して今このセイラ国は大変なことになってるっぴ。」

「ああ？ＬＶ３とＬＶ４のボスなら俺が前に退治したじゃないか。」

「勇者様が一か月も来なかったから代わりのボスが立ちあがったっぴ。といっても前のボスの弟だから見た目は同じだっぴ。」

最近のゲームはすごいな、ログイン履歴とかを自動的に読み取り、俺がここ１カ月の間全然ゲームをしていなかったことをこの自称妖精は知っているらしい。しかし、そうなると不思議な箇所がある。なんと言っても、ゲームの中に入るような感覚があり、暴れまわった最初の１回は１カ月前だが、その後も幹久と要により何度かゲームに入っていたはずなのだ。

「一カ月も来なかったって言われても前に来た時はゲームの中に入れ無かったぞ？」

「そんなの当然だっぴ。たとえ勇者様が不死身とは言え回復に一週間は体を休める必要があるっぴ。そんなことよりも、最低でも今回はＬＶ３のボスを倒してくれないと一週間後にはモンスターの数があふれて現実世界へと出て行くことになるっぴ。」

「ちょっとまて、そいつはマジか？」

自分のことを勇者とか呼んでいることとか、妖精のことなんかを完全に信じることはまだできなかったが、会話の中に俺にとって問題のある発言が含まれていたため、俺は聞き返す。

「嘘をついても仕方がないっぴ。勇者様がこちらの世界に来れるのと同じようにモンスターもあちらの世界に行けるようになるっぴ。もう少し勇者様が来るのが遅かったら本当にあぶなかったっぴ。」

「残念ながら俺は来週末から二週間ほど道場の合宿に行くからその間もリアルダンジョンができないぜ？」

「えええ？そんな合宿なんてほっておいてリアルダンジョンの世界に来てもらわないとこまるっぴ。」

「ふざけるんじゃねぇ。今までお金がなくって行けなかった合宿に前回の３００万のおかげで初めて参加できるんだぞ？絶対に俺は行くからな。」

自称妖精は俺個人の問題など問題ないと切り捨てて来たが、幼少期から牛乳配達、新聞配達、チラシ配り、バイトができる年になったらそれにバイトもというかなり忙しい毎日を過ごしてきた。唯一お金稼ぎではない行動としてやってきた格闘技、それも合宿や大会な

どといったお金も時間もかかる行事には参加することができなかったが、それでも俺の大切な時を過ごした場所を否定されるのは嫌な気がした。

「だったら、最低でもＬＶ６のボスくらいまでは倒してもらわないと困るっぴ。さっきも言ったようにプレイヤーの数が減ってモンスターがあふれ出したから繁殖をしているボスモンスターを最低でも半分まで削ってもらわないとこのままではこの世界からあふれだすっぴ。」

「解ったぜ。今回は一応中に入っちまったことも考慮して時間はたっぷりあるから、安全策をとりながら確実にＬＶ６のボスまではぶったおしてやるよ。」

「ＬＶ６が最低ラインであってそれ以上倒せるならその方がいいっぴよ。」

「解った解った。出来る限り多くのボスを攻略してやるよ。他に何か注意事項とかあるか？」

「そうっぴね。ここでしかうちとは話せないからできるだけ多くの情報をつたえておくっぴ。まず、この世界で起こったことは全部現実っぴ。だから不死身の勇者様が死ぬことはないとはいえ、いろいろと現実世界に影響があるからそこだけは気をつけるっぴ。」

以前リアルダンジョンを終えた時に弓やら防具やらを装備したままだった理由が解り、すこし納得する。そう言えば、ここ一カ月くらい体の調子がすこぶる良かった気がする。金銭的な余裕ができたためにバイトを減らしたのでそれが理由かと思っていたのだが、どうやらそれも関係するかもしれない。

「前回でそいつは経験済みだっつうの。あんな鎧の姿で出てきて大変だったぜ。」

「そうだったっぴね。じゃあ、鎧や防具を脱ぐときは気をつけるっぴ。リアルダンジョン世界での装備がなくならないように脱いだり手放したりした途端にエフェクトと一緒にこっちの世界に転送されるっぴ。」

「ほう。そいつは良いことを聞いたな。ひとつ質問を良いか？何故それらの大切な連絡事項を前回は教えてもらえなかったんだ？」

そう、もしこれらの情報を俺が一番初めにリアルダンジョンに入った時に、知っていれば、１週間に一度リアルダンジョンに来ることもできたし、それ以外の準備だってできていたはずだ。自称妖精はそんな俺の眼差しにドキリとしたのか、一瞬羽の動きが止まり、自然落下しそうになるが、パタパタと体よりも随分大きくて透明な綺麗な羽を動かすと説明を始める。

「そ、それは全国にちらばる転送機をピルルが管理するには無理だったから、前回このあたりで転送されたのに気付きこのあたりの転送機にしぼって見張っていたっぴ。」

「なるほどな。確かに全国各地にちらばったリアルダンジョンのゲーム機を管理しきれるわけないよな。俺はまたピルルが居眠りでもしていて見過ごしたのかとおもったぜ。」

「ギクっぴ。」

また羽の動きが止まったが、今度はすぐに回復して俺の顔の前あた

りで誤魔化そうか、それともきちんと謝った方がいいのかといった不安と悲しみに満ちた顔になる。

「ほう。心あたりがなきにしもあらずってか？ということは今回俺がボスの撃破に失敗しても前回ピルルが説明をしなかったためということで俺の罪悪感は薄くなるな。」

「それはこまるっぴ。女神様に怒られるっぴぃぃ。」

ピルルが泣き出しそうになったので俺はからかうのはやめにしてあげた。確かに初めてリアルダンジョンに入った時に教えてもらえたらもっと楽になっていたとは思うが、それでも表情を見るにあまり器用な性格じゃなさそうなピルルのことだ、リアルダンジョンができてから全国各地の機会を見守っていたとしたら、一か月くらい飛びまわっていて疲れ果てていたところに俺がゲームに入ったのかもしれないし、モンスターの増加に焦りを感じて自分が前回俺とコンタクトを取れなかったためじゃないかと一番気に病んでいそうだ。

「そんな泣きそうな顔すんなよ。俺は不死身の勇者様なんだろ？きちんとボスを退治してやっから安心しろよ。それに俺だけじゃなくって頼りになる仲間もいるしな。」

俺はピルルを安心させるように二コリとほほ笑むと、安心させるようにそう発言する。

「あ、仲間の人のことを忘れていたっぴ。勇者様があまりにも遅いし声の応答もないからって出発しそうになってるっぴ。」

どうやら天然頑張りやさんキャラっぽいピルルに俺は叱りの一言を返すのは忘れなかったが、それでも先ほどと同じ笑顔で必要なこと

だけ伝える。

「どあほう。そう言うことは早く言え。今回は絶対ＬＶ６以上のボス倒して三週間後絶対に来てやるからその時は続きを話してくれよ。」

どうやら天然頑張りやさんキャラっぽいピルルに俺は叱りの一言を返すのは忘れなかったが、それでも先ほどと同じ笑顔で必要なことだけ伝える。

「わかったっぴ。それでは良いダイブをっぴぃ。」

「おう。」

俺は真っ暗な中でのピルルとかいう自称妖精との会話を打ち切ると始まりの都市セイラへと降り立った。

「幹久・要待たせたな。」

「おっせえぞ。お前声も反応が無かったらトイレにでも行ったのかと思って出発しそうになったぜ。」

「悪い悪い。俺がなんでゲームの中に入れるのかが解ったから許してくれよ。」

「は？ってことは、今回はゲームの中なのか？」

「おう。そんなわけで今回はＬＶ６以上を目標にするんでよろしく。」

「おう。お前が本気出せばあんな雑魚武器でＬＶ５まで行っちまうんだＬＶ６なんて余裕だろう。」

「そうだ、武器の確認をしないとな。確か切れ味を全部２０までしてくれたんだったよな？」

「あ・・・」

「幹久。その反応はなんだよ。まさか・・・」

俺は武器を確認して唖然とした。切れ味２０どころか、お金はすべてなくなっており、切れ味も前回よりもあがっているが全部１１で止まっていた。範囲増加と貫通の追加効果は何故かつけてもらってあったが、これでは以前とさほど変わりがない。

「みぃきぃひぃさぁ。」

「いや、だって本当にゲームの中に入れるとは思ってなかったからさ。」

「確かに俺もそう思っていたが、っていうことは悔しがる顔を見たくってわざと上げなかったな？」

「えへへ。ごめんよガンタン。」

「男がぶりっこしてもキモイだけじゃい。まぁいいや。とりあえず、今回は是が非でもＬＶ６をまでのボスを全部倒さないといけないからそこんとこよろしく。」

「がんちゃんだったらＬＶ２で野兎捕まえてきたらＬＶ３とか飛ば

しちゃってもいいんじゃない？」

「切れ味のことだけじゃなく、ちょっとした事情があってな。そういや野兎必要なんだったら。とりあえずＬＶ２ダンジョンを攻略しながら説明すっから、お前ら二人とも準備できてるな？」

「いや、準備ができてないのはガンちゃんだけだからさ。」

要の意見もごもっともで、二人は俺を待ってる間セイラを観光していたみたいで消耗品などをきっちり揃えてあるらしい。

「俺はＬＶ２程度ならマジックランスさえあれば問題ないからいいんだよ。ましてや切れ味がついてんだから余裕でしょ。」

「確かにそうだね。じゃあサクッと三人分の野兎を狩りに行こうか。」

「了解。」

俺たちはそのあと三回ＬＶ２ダンジョンを攻略したが、武器の切れ味が高くなっている俺たちにとって無人の野を行くがごとしで、２０分ほどで三回も攻略してしまった。

「やっぱ本気のガンちゃんがいると余裕だね。これなら野兎二匹でも良かったんじゃない？」

「さっきも説明しただろ？今回の戦いは負けられないんだから、用心しておくにこしたことはないんだよ。」

ＬＶ２ダンジョンを攻略している間、普段あまり他ごとをしながら

話をすることが苦手な俺でも余裕があったため、先ほどまでの不思議な現象とピルルを含めた俺とこのリアルダンジョンの関係を話した。突然の勇者発言には笑っていた二人だったが、俺が合宿を楽しみにしていたことは二人も聞いていたため、協力してくれることになった。

「確かにガンちゃんが言うこともっともだよ。まぁ三回も行ったおかげで資金も十分だし、薬草以外にも状態異常の解毒薬も充分にそろったからＬＶ３へと行きますかね。」

そう言って俺たちは街からＬＶ３ダンジョンへと進んだ。

「薬草に関してはＬＶ５くらいまでは消費よりも獲得の方が増えそうだな。」

「そうあってもらわないと俺が困るって、俺の合宿がかかってるんだからな。」

「さっきの話だとピルルとかいう妖精に責任を押し付けて合宿にいっちゃうんじゃなかったの？」

「どあほう。そんなことできるかっつの。ＬＶ６までクリアできなかったら流石に俺も合宿キャンセルしてでももう一回ダイブしに来るからな。そん時はお前らも道連れだからな。」

「はいはい。ガンちゃんの頼みだったら３０万で手をうってあげるよ。」

「金取るのかよ。」

先ほどから勇者云々のせいでどちらかというとボケ担当になっていた俺だが、基本的にボケ役は幹久だ。ゲーム内では味方に攻撃しても意味が無いので言葉だけだが、肉体があったら、鍛えられた腕で小気味の良い音で突っ込みを入れていただろう。

「良いじゃんどうせ今回もゲーム内のお金が現実の世界にやってくるんでしょ？」

「まぁたぶんそうだとはおもうけどな。鍛冶屋で余った金はできるだけ俺の手元に置くようにするか？」

「いや、１００万もあれば十分だからそれはいいよ。それよりも前に俺たちがカード借りてダイブした時はお金が一銭も無くなってて大変だったからな。ある程度俺たちが持っていることによってお前が次にダイブした時に俺たちが物資を供給できるようにしておこう。」

俺の武器が鍛冶屋で切れ味が上がっていなかったのにはそういう理由もあったのか、悪友とはいえ、幼馴染を疑ってしまった俺は少し反省をする。

「そうだったのか。鍛冶屋で全然鍛えられなかったのはお金のこともあったんだな。俺、お前のこと疑ってごめん。」

「良いってことよ。それでもそこまでしか切れ味をあげれなかったのは俺たちの責任でもあるんだからな。」

「ガンちゃん。幹久にだまされちゃダメだよ。余ったお金を薬草に変えて僕に渡してあとで、二人で山分けしたんだから。」

「みぃきぃひぃさぁぁぁ！！」

先ほどの俺の感情を返せ、幹久の悪戯は今に始まったことではなく、こういった小さなものから大きなものまで昔から何度もだまされ続けてきた俺は幹久に恨みのこもった低めの声を出す。

「ちょま、要も共犯だろ？なんで俺だけ怒るんだよ。」

「どうせ首謀者はお前だろうが！！」

「ミッキーネズミさんばれてますよ。」

「そうですなカナメンさん。」

お互いに気心がしれているので、こういった会話は日常茶飯事だ。ゲーム内の名前を使って冗談に変換して、ゲームが終わるまでに俺の怒りが冷めるのを待つ作戦なのだろう。

「うっせぇ。それよりもうすぐボスだからベルトにちゃんと薬草セットしとけよ。」

「ガンちゃんと違ってＬＶ３はもう既に何度もクリアしてるんだから、心配しなくていいよ。っていってもしゃべりながら悠々とクリアできたのはガンちゃんがいて初めてできたことだけどね。結構ギリギリだったはずなのに嘘みたいだよ。」

「お前らデスペナ込みで４４の切れ味とか明らかに狙ったとしか思えないほど好条件からのスタートなんだから当然だろ。」

「ガンちゃんもついにゲームのことが分かるようになってきたんだ

ね。デスペナの関係でこれ以上無いってくらいの切れ味なんだよ。」

「わからあな。５０以上からはデスペナが異常すぎるから次の攻略のためにわざとデスペナが５の４９で止めたんだろ？今回は悪いがそんな悠長なこと言ってねぇでガンガン切れ味上げてくれよ。前人未到のＬＶ６ダンジョンまで攻略する予定なんだからな。」

「前人未到って、一応ＬＶ７までの攻略はされてるらしいよ。とはいえ、ガンちゃんならＬＶ８までもこのまま行っちゃうとか言いそうだから前人未到のダンジョンに行くって言葉も間違いじゃなさそうだけどね。」

ＬＶ３のボスも前と同じ感じだったのだが、ＬＶ２ダンジョンを３度も攻略した時に切れ味を上げたこと、残りの二人の火力が圧倒的に上がっていることもあってサクッと倒すことができた。

武器情報【４】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋２０
基本攻撃力３５（追加効果貫通・範囲増加）
マジックランス＋２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋２０
基本攻撃２１（追加効果貫通・範囲増加）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

カナメンさん
スタンダードランス＋５３
基本攻撃力６８（貫通・範囲増加）
マジックランス２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋５３
基本攻撃５４（貫通・範囲増加）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋５３
基本攻撃力６３（貫通・範囲増加）
ロングソード＋２０限界値
基本攻撃力４０（範囲増加切れ味プラス最大値２０）
スタンダードメイス＋５３

基本攻撃力６０（貫通・範囲増加）
ヘビーメイス＋２０限界値
基本攻撃力３５（ダメージ増加）

ＬＶ４&５

俺たちはＬＶ４ダンジョンに来た。俺一人でも攻略したことがあるとはいえ、二人は一度しかＬＶ４ダンジョンを攻略したことがないらしく、かなり気合が入っている。

「ＬＶ３ダンジョンでも１０分くらい攻略に時間がかかったし、サクッとＬＶ４ダンジョン攻略したいもんだな。」

「まぁここまでの敵は僕たちはいっかくだし大丈夫でしょ。」

「ん？いっかくって何だ？」

「一撃で倒せるって意味だよ。」

ゲーム用語が出てきて質問をした俺に、二人は丁寧に教えてくれる。しかし、その意味を知って俺は驚く。

「はぁ？お前らそんな強かったのか？じゃあ何で今までＬＶ４までクリアできなかったんだよ？」

「だってさ、二人でさばき切るにはここからのモンスターの量と動きはやばいんだよ。それに、他のＰＴが良ＰＴとは限らなかったから、他の人と行くのも中々踏ん切りがつかなくってね。」

「嘘だな。お前らだったら二人でもＬＶ４クリアできたはずだぜ。チキンだっただけだろ。」

「チキンいうな。計画的で用意周到と言って欲しいな。」

幹久も要もどちらかというとゲームの中での冒険は勇者のように勧めるが、いざ現実世界でとなると、しりごんでしまう節がある。俺の場合しりごみしていたら生きていけないほどの極貧生活のおかげで随分と鍛えられてしまっているので、現実世界でもそういうことはない。

「はいはい。ケンタッキーが食べたくなるからそこら辺で勘弁したるわ。」

「ガンちゃんには敵わないね。というか、僕たちよりも武器の切れ味が少ないガンちゃんが本当に大丈夫かの方が心配なんだけど。」

「一応俺も一撃で倒せるみたいだぞ。しかもスライディングとかじゃなくって普通の突きで一撃だわ。」

「範囲増加も無しに普通の突きをこんな素早く動いてる敵にあてれるのはガンちゃんだけだとおもうな。普通はスタンダードランスに切り替えるもんだよ？」

「プラス値の関係でまだマジックランスの方が強いんだから仕方ないだろ？」

どうやら敵にも弱点みたいなところがあるらしく、そこを的確に突けば俺の武器でも一撃で倒すことができる。どれだけ要や幹久の武器が強くなり過ぎているかが解るが、それでも二人でＬＶ３ダンジョン止まりのチキンさに笑ってやる。

「まぁ確かにその通りなんだけど、納得いかないな。」

結局以前攻略していたこともあり俺がサクサクっと敵を倒し、後ろから二人に援護してもらって余裕を持ってボスへたどり着いた。相変わらずアイテムを拾わない俺だったが、ＬＡのほとんどを取ってしかも薬草を使っていないのでカバンの中に薬草が大量に入っている状態になった。

「お前ら二人とも薬草足りてるか？」

「前でガンちゃんがほとんどの敵を倒すんだもん野兎の回復量の方が多いから薬草なんて使ってないよ。」

「だな。やっぱガンちゃんがいると違うぜ。このアイテム達をうっぱらったらかなりお金かせげるかもしれねぇぜ。」

「はいはい。ゲーム内のお金が貯まってもうれしくないだろっつの。」

「そのゲーム内のお金を現実世界へと持って帰れる奴のセリフじゃねぇぞ。第一ＬＶ６でどんな強い敵がでてくるかわからないんだから、今のうちに資金をためておいて薬草とか消耗品を補充しておくのはだいじなことなんだからな。」

あくまで堅実に進もうとする幹久、今回は負けられないのでそれが助かっているのだが、それでも慎重すぎると俺は思うが、ゲーム内のことに関しては知識の足りていない俺よりも頼りになるので、指示には従っておく。

「はいはい。俺も状態異常を直すアイテムは持ってないから次の街では買うようにするさ。光玉みたいな敵をひるませる消耗品とかは

お前らに任せるぜ、ゲームの中に入ってる分カバンがすっごい見にくいからな。」

「それくらいは任せてよ。敵をさばききってくれてるから余裕だよ。」

要がそう言ったが、そういった役目は幹久の方が得意である。弓を構えている要はどうしてもカバンを使うと隙ができてしまうが、盾をもった幹久は防御しながら安全にカバンを確認してアイテムを使うことができるのだ。

「そろそろボスだぞ。ガンちゃん先に光玉を投げるから、眼が眩まないようにね。」

「了解した。」

俺が一人で来た時はボスの攻撃を避けながらチクチク槍で突き刺していたのだが、本来の攻略方法的には光玉を使って怯ませてから倒すらしい。俺は要が光玉を出したことを確認すると、ダッシュでボスの懐にかけ込んでスライディングからジャンプ突きのコンボを決めて一旦距離を開ける。そこにライトウォーリアーの幹久が突っ込んできてボスに切りつける。単純なダッシュ切りだが武器の切れ味が全然違うので俺と同じくらいのダメージがあるかもしれない。

「このまま一気に叩きのめすか？」

「いや、一旦俺は距離を取る。こんなボスに近付いて攻撃を避けられるのはガンちゃんくらいだぜ。」

「じゃあ俺はこのままチクチク刺しまくるから、光玉を投げる時は

教えてくれ。」

「はいよ。ガンちゃんまで目を回したら意味がないからな。」

そのあとの連携は完璧といっても良かったかもしれない。遠くからの狙撃と俺の攻撃でボスをどんどん弱らせてさらに的確なタイミングで幹久が光玉を投げて切りつける。その時は俺も先ほどのスライディングジャンプ突きコンボかダッシュジャンプ突き下段突きコンボで一気にライフを削って3分ほどでボスを退治した。

「嘘だろ？前に四人ＰＴで攻略した時も１０分以上かかったのに、ボスが厄介すぎることが、このＬＶ４ダンジョンを避けてきた一番の要因だったはずなのに。」

「そりゃそうだろ。基本的にガンちゃんが前でチクチクやってくれてたから、タゲが固定されてこのボスの一番厄介な突進がなくなったからね。」

「あれは嫌だったな。光玉をうまく使わないとすっげえ勢いで遠くから攻撃してたアーチャーとかマジシャンに突っ込んで瀕死にされるもんな。追撃されたら即死って異常なダメージ過ぎるだろ。」

「ん？マジシャン？ひょっとしてこのゲームにはまだキャラクターがいたのか？」

「おま・・・リアルダンジョンの勇者様ともあろうものがそう言うことを言うんじゃねぇ。」

「俺がゲーム苦手なの解ってるだろ？」

俺は本当にゲームというものを理解してないらしい。ボスを倒した後のストーリー語りになったので、余裕もあって俺はゲーム内で足りていない知識を手に入れるべく二人に説明を要求する。

「そうだったな。このゲームにはガンちゃんと要の職と、俺みたいな職ともう二つ職があるんだ。」

「一つはさっき言ったマジシャン&ビショップだね。攻撃の杖で敵を攻撃したり癒しの祈りで味方を回復したりするよ。これは絶対にガンちゃんには扱えないだろうってあきらめたんだけど、もう一つならガンちゃんにはぴったりだったかもね。」

「もう一つってのはなんなんだよ？」

「ファイター&スナイパーだね。」

「なに？そっちの方が俺好みじゃねぇか。」

「だってスナイパーもファイターも女性キャラの格好があんまり可愛くなかったんだよ。それに元々支援に徹してもらう予定だったから、スナイパーよりもアーチャーの方が動かしやすかったから仕方がないんだって。」

「そうそう。最近忘れかけてたけど、お前は俺たちの潤い担当だったんだからな。」

俺のキャラを決められた理由を聞いて唖然としてしまうが、それよりも気になることがあったのでそちらを優先する。

「勝手にそんな担当決めんなよな。それに支援に徹して欲しいんだったらマジシャン&ビショップの方が良かったんじゃないのか？」

「それこそ潤いが足りないよ。二人ともシスター萌えってわけでもないのにわざわざ露出の少ないキャラを選ぶわけがないじゃないか。」

「お前らの気持ちは十分理解したぜ。ところでボスを倒してみて思ったんだが、要はランス使わないんだから俺のランスと交換しちゃいけないのか？」

「「あ・・・」」

「お前らなぁ。よく考えたら俺がいない間にランサ&アーチャーじゃなくて要は新しいキャラ作っておけばもっとバランスの良いＰＴになってたんじゃないのか？」

ゲームのこととはまったく関係ないのだが、それでも気になったことをつらつらと述べていくと、何故か二人から悔しそうな声が返ってくる。

「まさかゲーム初心者のガンちゃんにまともなことを言われるなんて・・・」

「要落ち込んでないでここはガンちゃんにお前の武器をやれよ。ガンちゃんならいっかくできるんだったら野兎のライフ回復で十分なんだからわざわざマジックランス使わないで要のスタンダードランスを使った方が圧倒的に楽だろう。」

「解った。どうせ鍛冶屋の値段も変わらないしこれはあげるよ。新しいキャラについてはガンちゃんが合宿に行っている間に考えておくから今回は待ってね。」

「おう。幹久と相談して一番いいキャラを選択してくれ。幹久と二人だったら武器の切れ味が少なくってもＬＶ３くらいならクリアできるだろ？」

二人に足りないのは勇気だけなので、俺が合宿に行けない間にできるだけ二人にリアルダンジョンを攻略するための依頼をしておく。

「そうだね。できれば二人でもＬＶ４クリアできたらいいんだけど、そうも言ってられないみたいだし、がんばってみるよ。そのためにも軍資金は置いて行ってね。」

「そうだな。このゲームをクリアしないと世界の危機的な雰囲気もあるし、金は置いて行ってやるよ。」

「ありがとう。じゃあ今度は５０万ほどでいいよ。」

基本貧乏人の俺は５０万という金額に驚いてしまう。

「二週間しか合宿に行かないのに５０万もいらないだろうが。」

「いやいや、実際にゲームをするのは3週間だし、正直いってガンちゃん無しじゃあノーコンテニューなんて普通無理だから。」

「そうなのか？」

「そうなんだよ。武器が敵を一撃で倒せるようになるまでは何度もコンテニューしながら強くするのがこのゲームだからな。金は大量に必要だ。」

「そうだったんだ。何かおれ合計２０００円くらいしか使ってない

気がするんだがそれってゲーセン側からしたらすっごい迷惑？」

以前５００円とゲームの中に入れなかったときに一度コンテニューしたので１０００円そして今回ので本当に２０００円しか俺はこのゲームに使っていない。ゲームセンター側からしたら何度もコンテニューしてお金を落として言ってくれることを期待しているはずだ。

「そうだろうねぇ。でもいいじゃないか。ゲームクリアができる人がいたって情報が流れたらそれだけで客は集まると思うし。」

「そうだな。それに俺がボスを倒さなかったことがこのゲームの難易度を各段に上げていたらしいからな。これからは敵の数が少しはへるんじゃねぇかな？」

「そういえばそんなこと言ってたね。」

「ＬＶ６までクリアしたら一回一度行ったダンジョンに潜ってみるか？そうすれば敵が本当に減ってるか解るんじゃないか？」

「そんな一度に減ることはないとは思うが、それも一理あるな。とにかくＬＶ５もＬＶ６もサクサクっとクリアしちまおうぜ。」

俺の宣言通り、ＬＶ５ダンジョンは結構簡単にクリアできた。というのも、前回貫通を持っていなかったために苦戦してやられたモンスターが要からもらったスタンダードランスを使ったら一発で倒せて、要や幹久も一撃で敵を倒すことができるのでダメージよりも野兎の回復の効果もあって薬草の消費＜薬草の獲得になったことが大きいだろう。ＬＡを取りまくっていた俺は薬草が余って来たので中堅でがんばっている幹久にあげた。それでも薬草のお世話にならない俺とピルルいわく増えすぎた雑魚モンスターの影響でたくさんの

薬草が手に入ったのだがな。

「薬草を使わない人が一人いるだけでこんなに楽だとはね。」

「そうだな。俺たちに回ってくる薬草が多いから、その分野兎の回復待ちで進むのを自重したり、街で大量に買い込んだ薬草がなくなるってことがないもんな。」

「そういってもらえるとダイブした甲斐があったぜ。これならＬＶ６も何の心配もしなくていいんじゃないか？」

ここまで一気にきた俺は随分と気が大きくなっていた。野兎もいてしかも武器の切れ味もすさまじい今の状態で恐れることなんてないのではないかとすら思えてくる。

「いやいや、街に着いたら説明するけど、あるアイテムがないとＬＶ６はクリアができないようになってるんだぜ。今のうちにお金は貯めておいて損はないってわけだ。」

「お前ら薬草使ってるのにお金貯まってるのか？」

「ボスのクリア報酬だけのガンちゃんと違って俺と幹久はアイテムを拾ってるんだから当然だよ。というかボスのクリア報酬だけでお金が貯まっていくガンちゃんが異常すぎるんだよ。」

「そうだぜ。今は俺たちも薬草を買ってないが、本来大量に薬草を買っていってもボスの時にコンテニューしないといけないほど難易度の高いゲームなんだからな。」

「そんなもんか？そうこういってるうちにボスまで着いたみたいだ

ぜ？」

「そうだね。今度のボスは光玉が効かないからさっきみたいには行かないと思うけど、がんばろうね。」

「幹久死ぬんじゃねぇぞ。大量にある薬草を使って生き延びろよ。」

「解ってるぜ。デスペナで武器の切れ味が落ちたらこのままＬＶ６突入ができなくなっちまうからな。」

「そういうことだ。街に行けば薬草は買えるんだからケチケチすんな。本当に無理だと思ったらヘビーアーウォーリアーにでもなっとけ、攻撃は俺がやってやるからさ。」

「ヘイヘイ。」

こんなことをいってＬＶ５ダンジョンのボスに向かって行ったはずなのだが、盾を使ってうまいこと回り込む幹久と遠くから敵を狙撃する要と武器の威力があがって俄然さきほどよりもやる気の出ている俺の敵ではなかった。

「楽勝だったじゃねぇか。思ってた以上に雑魚だったな。」

「本当だね。ガンちゃんがいるってことがこんなに違うとは思わなかったよ。」

「そうだぜ。俺たちがＬＶ５クリアした時なんてもう一人ライトウォーリアーの人とビショップの人がいて何とか辛くも勝ったって感じだったのに、お前ってやつは。」

幹久と要がクリアした時は４人ＰＴでしかも二人と同じくらい手なれた人達で結成されたＰＴだったらしい。上級者は事前にＰＴを募集してからゲームに望む云々といろいろとこのゲームのうんちくを言っているが、せっかく聞いたこのゲームの情報も今後三人でダイブすることになる俺たちにはあまり関係の無い話しだった。

「そうだったんだな。そこまで誉められると本当に俺が勇者とかいうのになっちまったきぶんだぜ。」

「いやいや本当に勇者様なのかもしれないよ？だって俺たちと違ってゲームの中に入り込んじゃってるんだからね。」

「まぁ俺がボスを倒さないとモンスターがあふれるなんて言われても実感できねぇけどな。」

「それはボクらだって一緒だよ。」

「まぁ本当かどうかなんてわかんねぇけど、ＬＶ６のボスを倒しておけばそんな心配しなくて済むんだからサクッとやっちまおうぜ。」

「了解勇者様。」

「やめろよ、要。」

そうはいったものの、ここまで順調に進んでおり、４０分近くもゲームを続けてきた俺たちは今まで行ったことがないＬＶ６に早くいきたくてうずうずしていた。

「鍛冶屋は何にも変わったことがないじゃないか。」

「ここで一番重要なのはアイテム屋だぜ。アイテム屋に売っているカイロを買わないと次のＬＶ６は絶対に攻略できねぇ。」

「カイロだぁ？それってひょっとして俺たちが普段使ってるあのあったかい奴か？」

「たぶんそうだね。攻略した人の話によると、ＬＶ６のダンジョンは寒いらしくってカイロ無しだと自動で野兎より少し少ないくらいずつだけどライフが減っていくらしいよ。」

「なるほどな。つまり野兎の効果がずいぶん薄くなっちまうってわけだ。だったらこのカイロってやつは購入決定だな。」

「何個買っていく？攻略した人の話だと４人ＰＴで一時間くらいかかったみたいだし、余裕を見て２０個くらい買っていく？」

「そんなに必要か？」

２０個と言ってもカバンの中に入っており、しかもベルトのところから使う俺はそんなに気になる物でもない。しかし、元々貧乏が体にしみ込んでいる俺はできるだけ節約しようと勝手に頭と体が反応してしまうのだ。

「一個で五分間しか効果がないからね。これくらいは必要だと思うけど？」

「まぁお金は余ってんだからいいんじゃねえか？ノーダメージのガンちゃんは良いかもしれないけど、要の言う通り俺たちにはこれくらいあった方が安全だとおもうぜ。」

「すまん。守銭奴してる場合じゃなかったんだったな。世界のピンチと俺の初合宿参加がかかってるんだ。これくらいの出費は多めに見よう。」

「そうだね。これをクリアしたら合宿に参加できるのが決定するんだもん。とりあえず今のところは用心して多めに買っておこう。もし余ったら、モンスターが減っているのか見るためにもう一度クリアしてもいいしね。」

「なるほど、じゃあ二十個買っていこうか。」

こうして俺たちはついに目標だったＬＶ６ダンジョンに準備万端で向かうのだった。

あれ？俺ってまた薬草かってねぇ。まぁそれはいっか。

武器情報【5】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋６２
基本攻撃力７７（追加効果貫通・範囲増加）
マジックランス＋２０限界値
基本攻撃力４０（吸収）
スタンダードボウ＋２９
基本攻撃３０（追加効果貫通・範囲増加）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

カナメンさん
スタンダードランス＋２９
基本攻撃力４４（貫通・範囲増加）
マジックランス２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋７２
基本攻撃７３（貫通・範囲増加）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋７２
基本攻撃力８２（貫通・範囲増加）
ロングソード＋２０
基本攻撃力３５（範囲増加切れ味プラス最大値２０）限界値
スタンダードメイス＋７２

基本攻撃力７９（貫通・範囲増加）
ヘビーメイス＋２０
基本攻撃力３５（ダメージ増加）

LV6&7

「おいおい、敵のレベルがまた一段と上がったな。」

「そうだね。LV5は初めてじゃなかったからそこまで思わなかったけどあそこも貫通がないと倒せない敵がいたりと武器の制限がされる分、結構中級者泣かせなところもあったけど、これは上級者ですら投げ出すゲームといわせるだけのことはあるよ。」

「そうなのか？動きは確かに変わったから最初は戸惑ったけど、慣れちまえばなんてことはないんじゃねぇか？」

「そんなこと言えるのはガンちゃんだけだよ。そう思うんだったらもう少し取りこぼしを少なくしてよ。」

「んなこと行っても流石にこんだけ敵が多くっちゃ無理だぜ。」

「もう、相変わらず話すことと行動するって二つのことができないんだから、無駄口たたいてないでさっさと敵を倒してよ。」

「ヘイヘイ。」

俺は話すことをいったんやめて集中する。カイロと野兎のおかげでライフゲージは回復の方向に向いているので集中さえすればこんな奴ら怖くない。今までと違って薙ぎ払いをうまく使わないとノーダメージで倒すことはできなくなったとは言っても、薙ぎ払いを使えば後ろに取りこぼすのは、空から飛んでくる奇妙な鳥だけでそいつに関しては要と幹久も仕方がないことが分かっているので二人で楽

しそうに会話しながら倒している。俺も器用な人間だったらあいつらの会話に入っていきたいんだが、かすっただけの攻撃でもライフがかなり削られることからも気を抜くと俺でもヤバい。
微妙に減ったライフを野兎が回復してくれて薬草を使うというほどではないにしても今までのように余裕があるとは言えない。

「ガンちゃんたまには薬草使えよ。どうせカバンを確認してないだろうけどＬＡ取ったら２分の１の確率で出るんだから大量にあるはずだぜ。ここらで薬草を使う癖をつけておかないとボス戦で死んじまうぞ。」

「了解。」

俺は幹久からの助言を受けて薬草を使うようにした。ライフゲージが半分以下になったら絶対に使えといわれたのでそうしていたら、回避しないでわざと攻撃をくらったほうが倒し易い敵も存在したことが判明して先ほどよりもサクサクと敵を倒していくことに成功した。
そうして進んでいくと、要はまだ良いのだが幹久の薬草の量が足りなくなってきたらしい。

「ちょっと進むのをやめてカバンの中身を確認してみるか。」

「悪いな。もし十分あるようだったら少し分けてくれ。」

「ああ、えっと・・・毎回あんまり使わずに来たのもあって一列あんだけどいくらくらい欲しい？」

「一列だと？そ、それじゃあ三束もらえるか？一列６つアイテムを置けて一束２５５個だから・・・１５００個も薬草を持ってやがっ

たのか？」

「ああ、一回も買ったことないんだけどな。」

「そんなことはずっと一緒に買い物行ってたんだからわかってるぜ。一束４０万くらいするからな。俺だってここに来る前に一列買ったっていうのに、本物の化け物だな。」

「それを言うなら勇者様だよ。ね。不死身の勇者様。」

語尾に♪でもついていそうな雰囲気でそう言われると俺は何か嫌なものが背中を通る感覚を覚える。

「要、どっちかっていうと幹久の発言の方がまだ寒気がしないぜ。お前らと違ってカイロ使わないと本当に寒い場所に俺はいるんだからあんまり変な発言をするな。」

「あ、ガンちゃんまた敵が来たからさっさとカバンから薬草だして迎撃。」

「ヘイヘイ。」

ＬＶ５ダンジョンを超えたあたりからこうして止まっていても敵が出現するようになった。それもかなりの頻繁なため、普通の人なら止まっていても野兎の回復では追い付かないことだろう。まぁ俺みたいに進んでいても野兎の回復で追いついてる奴もいるんだからそれはあまり言いっこなしなんだがな。

「それにしてもＬＶ６のモンスターの数は異常な気がするよ。ガンちゃんが倒さないと減らないってピクルスの言っていたことも本当

かも知れないね。」

「ピクルスじゃなくてピルルな。そういえば俺は一回ＬＶ５の途中まで進んでるんだったな。つまり要は俺が全く進んでいなかったＬＶ６についたから難易度が跳ね上がったって言いたいのか？」

「正解。ってかガンちゃんそれだけ頭の回転が早いのになんでゲームできないんだよ。あと二つ以上のことをすることも極端なほどできないよね。」

「しゃあねぇだろ俺の頭は一つのことに集中してするように作られてるんだよ。１の早さで二つのことをするのと２の早さで一つのことをして次にもう一つに取り掛かったら、結局同時に終わるだろ？そんなもんだ。」

「ヘリクツこねてないでまた敵が来たよ。」

「ってか要が弓で倒してもいいんじゃねぇか？」

「弓にはガンちゃんがやってるみたいにダッシュ突きみたいな強化コマンドがほとんどないから一撃で倒せないの。」

「ヘイヘイ。それだけ敵さんも強くなってきたってことだな。」

「んじゃ野兎でライフも全快になったことだしそろそろ進もうか。といってもここまで十分カイロの消費を抑えて来れたんだから、そんなに辛くないとは思うけどね。」

「おう。さっさとこんな寒い場所はクリアしちまおうぜ。」

「お前らは本当に寒いわけじゃないだろうが。まぁ俺もカイロを使ってるから寒くはないけどな。」

「ほらほら進みだして敵が増えたらしゃべってると敵を取りこぼすよ。」

「ちくしょう。」

そのあとも俺たち三人は順調に進み、今までの経験上もうすぐボスというところで思わぬ発見があった。

「こいつ、野兎か？」

「いやたぶん野兎の上位版だろう。一匹野兎を逃がして薬草を与えてみよう。」

そう言ってデスペナ回避のために武器を俺に預けると幹久の奴がわざと死んで見せて野兎を逃がした。幹久がコンテニューしたのを確認して俺は薬草を与えると、名前がでて雪兎が仲間になった。雪兎の回復量は野兎の倍近くあり、今まで中堅で大量の薬草を消費していた幹久がそれほど薬草を使わずに済むようになった。

「なるほどな。今度からは野兎じゃなくて雪兎を手に入れるようにしよう。そうすればダンジョン攻略が楽になる。」

「でも野兎がいなくちゃＬＶ６ダンジョンなんて攻略できないんじゃないか？」

「それはボスを倒してもう一度行ってみないことには分からないな。ガンちゃんがボスを倒したらモンスターが減って難易度が下がるか

もしれないだろ？」

「そりゃそうだね。ガンちゃんがんばれ。」

俺の後ろで幹久と要ののんきな声援が飛ぶ。俺はお前らに取りこぼしが少ないようにと一生懸命モンスターを退治してるって言うのに。野兎の時同様に雪兎はボスの近くにいたようで、少し進むとボスがいた。俺たちはいつものように俺が近づいてボスに牽制を加えつつもボスの攻撃を紙一重で回避して、幹久が回り込んで背中から攻撃、要は離れた場所から狙撃といった既に鉄板となりつつある攻略方法でボスを撃破した。

「ボスよりもボスまで行くまでに薬草を残すことの方が大変だったね。」

「そうだな。幹久の薬草が切れそうになった時は流石の俺も焦ったぜ。」

「もう少し止まったり進んだりしながら行けば俺だってもう少し薬草を抑えることができたんだぜ。」

「確かにその通りかもしれないが、おかげでカイロたったの八個でクリアできたんだから良いじゃないか。」

「本当だね。ということは多少の誤差はあるだろうけど、４０分くらいでクリアしちゃったってことかな？」

「そうだな。武器も強化できたし、次はもっと早くクリアできるかもしれねぇぜ。」

「それに薬草もほとんど使わないで済むかもしれないね。とくにガンちゃんは絶対に不要になるから、今ある分を幹久にあげちゃおうよ。」

「いいぜ。結局あの後も一束貯まったから、１０００個くらいあるしな。」

俺たちはＬＶ６のクリア後の町に来て、心底喜んだのは鍛冶屋でスタンダード武器にすごい効果をつけることができたことだ。

「しかし、吸収の効果ってマジでこんな良い効果をつけれるんだったらＬＶ７以上をクリアできる人がいてもおかしくないと思わないか？」

「確かにその通りなんだけど、やっぱりそれには理由があるのかもしれないよ。とにかくさっきの推論が正しいのかはＬＶ６ダンジョンにもう一度雪兎を取りに行ったら解るんじゃないかな？」

「そうだな。カイロは十分に足りていることが分かったし、武器も強化したし、いっちょ行ってみるか。」

そのあと吸収の効果がついたこともあり、消耗品も充分だと判断した俺たちはもう一度ＬＶ６ダンジョンに潜った。そして俺たちの推論は正しかったことが判明した。さきほどまで止まっていてもしょっちゅう現れたモンスターたちの出現頻度が明らかに下がっていたのだ。そうはいってもＬＶ４までと比べたらまだまだ多いし敵も強いのだから気を抜くことはできないはずなのだが、吸収装備のおかげで俺は全く薬草を使うことがなくなり、幹久でさえドロップで落ちる消耗品の方が多くなってしまった。

「敵が現れる頻度が下がるだけでこんなにも難易度が変わるもんな

んだね。」

「そうだな。これだったら吸収をつけなくても普通にクリアできるかもしれん。」

あまりにも順調に進みすぎた俺たちは野兎を逃がしてから雪兎に薬草を与えるという行動を取り忘れたのだが、結果的に上位の雪兎が優先されて野兎が逃げて行くことが判明し、もし次にＬＶ６に突入するのがきついと感じたらＬＶ２に行って野兎を捕まえても良いことがわかったので安心するのだった。

「どうする？目標だったＬｖ６をクリアできたんだから、このままＬＶ７に行ってしまうのもありだし、無理しないでもう一回ＬＶ６をクリアして雪兎三匹にしてから行くのもありだとおもうぞ。一回目と違って２０分ほどでＬＶ６をクリアできたしな。」

「そうだな。じゃあもう一回ＬＶ６行こう。ここまで来たら確実にＬＶ７もクリアして安心して合宿に行きたいからな。」

「了解。」

武器を強化した俺たちは残り少なくなったカイロだけ買ってＬＶ６に挑んだ。薬草の消費より獲得の方が上回ったことにより、物資の補充がそれほど重要でなくなったのだ。しかもアイテムでカイロが落ちるらしく、俺以外はカイロすら買わなくて平気だと言いだす始末だった。

ＬＶ６にもう一度行ったのは結果からいえば正解だった。というのも、さらにモンスターが減っていることが確認できたからだ。どうやら一回だけでは敵を減らしきれていないらしく、こうなってくる

とＬＶ５などももう一度潜って敵を倒しておいた方がいいのかもしれないが、その分ＬＶ７の敵を倒せば良いという幹久と要の助言に従ってＬＶ７に進むことになった。ＬＶ７ではＬＶ６と違いカイロという枷がなかったので、俺も急ぐことはなく、のんびりと進んで敵を倒していった。ＬＶ７のボスは自分の近くに地震をつかって全体攻撃を仕掛けてくるので、ヘビーウォーリアーのダメージカットでしか近付くことはできなかったため、俺と要は遠くから狙撃するしかなかったのだが、ボスがダメージの多い要に襲いかかることが判明し、俺の武器と途中で交換して俺が逃げながら弓で狙撃をする戦法に切り替えて俺の放った矢を受けてＬＶ７のボスもついに倒れた。

先ほどの鍛冶屋で吸収なんて追加効果を手に入れた俺たちは、今度はどんな追加効果がと期待していたのだが、今さら何故か固定ダメージで１０程ダメージを追加するといった良く分からない効果に三人で凹む。幹久いわく、ＬＶ８ダンジョンには通常攻撃では倒せないような敵がいて、そいつには固定ダメージ１０がないとライフゲージが減らないんだと主張したので、あえて幹久の武器だけ固定ダメージ１０をつけないでおくことによって証明するらしい。つまりＬＶ８も俺一人に戦わせる気満々ということだ。

「なぁ、かなり長時間ゲームしてきて、俺そろそろトイレ行きたいんだけど、どうやったら辞められるんだ？」

「ガンちゃんにしては中々いいタイミングで聞いてきたな。このゲームの一番の辛いところはデスペナであることは解ってるな？そしてデスペナは武器の切れ味が落ちるというものだ。」

「ああ、そうらしいな。俺はこれまで経験したことがないがな。」

「そうだったね。まぁとにかく説明しよう。そのデスペナを回避する方法が街にはあるんだよ。」

「ふむふむ。ということはそれをすれば次から切れ味が落ちていない武器で開始できるというわけか。」

「そういうことだ。俺たちも流石に疲れたし、ガンちゃんのポケットマネーを整理してどれだけ現実世界に持って帰るかを確認したら終わろうぜ。」

幹久と要に連れられてきたのは、倉庫と呼ばれる場所だった。幹久と要もＬＶ５をクリアした時に一度だけ使っただけでＬＶ４までのダンジョンにはないらしく、半分近くがサイトの情報らしかったが、武器を倉庫に預けると、次にダイブした時にその武器が残っているらしい。俺たちは切れ味が落ちては困るスタンダード系の装備をすべてそこに預けると、わざとＬＶ８ダンジョンに雑魚武器のまま潜り、薬草などの消耗品を使わないという縛りを設けて進んだ。ＬＶ８ダンジョンの敵は攻撃力以上に手数が多いモンスターが多く、俺も避けきることができずに、二人よりも長く敵を倒していたとはいえ、すぐに死んでしまった。

現実世界D

「な、なんじゃこりゃぁぁぁぁ！！」

「が、ガンちゃんどうしたの？」

「あけるな。と、とにかく着替えを。」

「う、うん。」

要にもらった着替えを着た俺だったが、テンパリ過ぎていてカバンからお金を出すのを忘れて装備解除をしてしまったために、お札がバラバラに散らばって着替えを終えてもそれを回収する必要があった。

「ガンちゃんどうしたの？二度目なんだから、衣装に驚いたわけじゃないんでしょ？」

「こいつは俺らにチキンとか言ってたやつだが、俺らよりもチキンだってことが判明しちまったぜ。」

リアルダンジョンの閉鎖空間から出てきた俺に声をかける二人に向かって俺は恨み事の一つも言いたくなったが、とにかくこの場ではまずかったので、移動しようと促す。もちろんバカなことをいった幹久に拳骨をお見舞いしてからだが。

しかし、そうもいかないらしく、俺たちは周りをたくさんのゲームマニアたちに囲まれてしまった。

「あなたがガンちゃんさんですか？今のプレイずっと見させてもらいました。すっごいですね。ファンになりました。」

「ガンちゃんさん本当の名前はなんて言うんですか？良かったらメル友になってもらえませんか？」

「お願いします。握手してください。」

難攻不落と言われたリアルダンジョンを実質ノーコンテニューでLV7までクリアした俺たちは一躍ゲームセンター内のヒーロー？になっていたらしい。外からプレイ内容を見れるようになっているが、この画面は各地のゲームセンターと通信でつながっているらしく、ここにいない人もご丁寧にどこのゲームセンターでプレイしていたのかまで表示されるらしく。全国的にファンができただろうと幹久などは鼻高々だ。

「悪いんだけど長いことゲームしていて疲れているから後にしてもらえないかな？俺の名前だけは教えてあげるよ。岩倉翼だよ。」

「翼さんっていうんですね。ボーイッシュなところもカッコ良いです。本気で俺惚れました。」

「おいおい。こいつは・・・」

「ちょっと話があるから来て。」

「お、おう。」

幹久と要を連れてとりあえずゲームセンターを出ると駅にある公衆トイレへと向かう。障害者用のトイレなら三人が入っても全然問題

ないくらい広いので、そこに誰にも見つからないように入ると、二人に奇声を上げた理由を説明する。

「俺、女になっちまった。」

「「はぁぁ？」」

二人が驚くのも無理はない。俺だって信じられないが、本当になってしまったのだから仕方がない。乙女の恥じらいという感覚がなぜか存在するため現物を見せたり触らせることは断ったが、マイクを通していたから変だと思っていたがゲーム中から声が高くなっていたと要が認めて、スウェットの上からでもわかる胸の膨らみをもって幹久も納得する。そのあと二人を追い出して俺はそのまま我慢していた用を済ませると男と違い面倒なことがたくさん起こったが、公衆トイレから出て幹久と要ともう一度合流する。

「とりあえず、やっぱり今回も服屋にいくぞ。下着を買う勇気はまだないが、それでもなんだか落ち着かないからある程度の服を買おう。」

俺たちは服を買って少し落ち着くと、ゲームセンターにたくさんのファンたちを待たせたままだったことを思い出して向かう。一時間以上待たせたにも関わらずそこには何人かのファンたちが待っており、どうやって攻略したのかを俺がゲームの世界に本当に入って動いていることを避けて説明すると、体感型ゲームの神だと崇められることになり、結局そのあとも長々と説明をさせられた（ゲームがわからない俺は基本的には幹久と要にすべて投げ槍だったが）

武器情報【6】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋８７
基本攻撃力１０２（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ＋１０）
マジックランス＋２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋５４
基本攻撃５５（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

カナメンさん
スタンダードランス＋５４
基本攻撃力６９（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
マジックランス２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋８７
基本攻撃８８（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋８７
基本攻撃力９７（貫通・範囲増加・吸収）
ロングソード＋２０限界値
基本攻撃力３５（範囲増加）

スタンダードメイス＋８７
基本攻撃力９６（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ヘビーメイス＋２０限界値
基本攻撃力３５（ダメ増加）

現実世界E

俺は女になっちまったとはいえ、体の特徴を隠して合宿に参加した。長くなった髪や明らかに変化しちまった雰囲気に気づかれるかもとドキドキしていたが、案外気付かれないと余裕をこいていた。トイレに行く時に道場の師範代に注意されてバレバレだったことが発覚し、元々道場には少数だが女の子もいたこともあって翌日からはそちらに入るように言われたのだが、俺の強さに関しては男の時と全く変わっておらず、むしろリアルダンジョンに入ってから絶好調の俺は男子に混ざって稽古をすることになっちまった。それでも充実していると言える合宿となり、初めての合宿と思いっきり楽しんだ俺は真冬の手持ち花火まで楽しんでニコニコ顔で帰宅したのだった。

「おい。何のんきにただいましてるんだよ。早いとこゲーセンに行かないとやばいぜ。」

「は？」

帰ってきた俺を待っていたのは幹久だった。帰宅時間などは事前に知らせてあったので不思議でもないのだが、そのあわてた様子にただただ驚く。

「どうしたんだよ？」

「ガンちゃんさては合宿中ニュース見てないな？」

「ああ、師範代の別荘にはテレビないからな。」

「荷物を置いてさっさとゲーセン行くぞ。道道俺が説明してやるよ。」

幹久の説明を聞いた俺は駅前のゲーセンへと駆け込んだ。そこには既に要が待機しており、以前ＬＶ７までクリアしたＰＴだと説明して俺たちのためにゲーム機を予約しておいてくれていた。

「事情は幹久から聞いた。さっさとダイブするぞ。俺はピルルから説明を受けなきゃいけないからお前らは先にＬＶ２ダンジョンに行って野兎を捕まえておいてくれ。」

「わかったよ。」

要がダイブしようとゲーム機に入ったと同時に、幹久の奴も到着したので俺も急いでダイブするべくゲーム機に入って大変なことに気づいてしまった。

「幹久、俺金もってなかった。５００円貸してくれ。」

「相変わらず一つのことに集中すると周りが見えなくなるのね。私が貸してあげるからさっさとあんたはダイブしなさい。」

「サンキュー桂。ってなんでお前ここにいんの？」

「あんたらの新しいＰＴメンバーでしょうが、流石に三人じゃきつくなるかもしれないからってネズミに拝み倒されて手伝ってるの。」

「そ、そうなんだ。とりあえずサンキュ。」

桂にお礼を言うと、俺は急いでカードと５００円を入れるとダイブ

する。

勇者と妖精β

ピーピーピピピピッピ！

「認証番号一致、リアルダンジョンにようこそ。あなたの名前はガンちゃんさんですね？今からリアルダンジョン始まり都市、セイラへ転送いたします。」

おなじみのナレーションだ。後で幹久に聞いたところによると本来のナレーションは全く違うらしく。このナレーションが聞こえたことがダイブ成功したことの証になるわけだ。

「ピルル。出て来い。」

「ここにいるっぴ。それよりも遅いっぴよ。」

「遅くねえだろ約束通りＬＶ６以上のボスを退治して３週間だ。むしろ最短で戻ってきたといっても過言じゃねえ。第一モンスターが現れたのは昨日だろ？俺は今日帰ってきたんだよ。」

「それはしかたがないっぴね。とにかくＬＶ４ダンジョンに溢れたモンスターを倒せば外に出てしまったモンスターたちはリアルダンジョンの世界に帰ってくるっぴ。」

「ＬＶ４って確か俺はあそこのボスも倒したぜ？」

「ＬＶ４のボスはＬＡを違う人がとったっぴ。だから勇者様が倒してないからすぐに復活してしまったっぴ。」

「そういう大切なことはちゃんと教えろよ。あと俺の体についても言い忘れてただろ？」

「うちはちゃんとゲーム内で起こったことが現実に影響するって伝えたっぴ。体がどうしたっぴ？」

「俺は男だったんだよ。ゲームから出たら女になってたんだ。そりゃ驚くだろ。」

「そうだったっぴ。それは大変だけど、ピルルたちにはどうしようもないっぴ。リアルダンジョンの世界に慣れればきっと自然になっていくから大丈夫っぴ。」

「全然大丈夫じゃねぇよ。それって俺が女であることを納得しちまうだけじゃねぇか。」

「そういうことになるかもっぴ。とにかく、ＬＶ４ダンジョンのボスが残っていたことによってＬＶ３ダンジョンのボスＬＶ７ダンジョンのボス、ＬＶ５ダンジョンのボスが復活してしまったから、この四つを倒してほしいっぴ。最悪ＬＶ４とＬＶ３のボスを倒せば一週間ダイブできない間にモンスターがそっちの世界に溢れることはないはずっぴ。」

「んなまどろっこしいことしてられっか。ＬＶ７は無理でもＬＶ５までのボスは俺が片づけてやんぜ。」

「他に聞きたいことはあるっぴ？」

「たくさんあるけどとにかく今はＬＶ４に早いこと潜らないとやば

いみたいだから、このへんで終わりにするぜ。一週間後絶対に詳しく事情を説明しろよ。それまでに俺に何を伝えるか考えておいてくれ。」

「わかったっぴ。うちも勇者様の手伝いができるようにきちんと考えておくから今回はがんばってＬＶ５までのダンジョンを攻略するっぴ。良いダイブをっぴ。」

ピルルの声が遠くなり、本格的なダイブが始まる。俺はセイラに着くと、とりあえずマイクを通して幹久たちの状況を確認する。

「早かったな。そろそろ一回目のＬＶ２ダンジョンが終わる。とりあえず、始まりの街に戻るから倉庫に武器を取りに行っておいてくれ。」

「解った。ところで桂も一緒にいるのか？」

「ああ、お前が合宿に行く前に説明できたらよかったんだが、良い報酬のバイトって言ったら引っかかってくれたぜ。」

「ちょっと、そんなこと言ってないでしょ。あんた達が困ってるっていうからバイトを削ってゲームするからバイト代分くらいはもらってるけどさ。」

「悪かったな。これが終わったら今までの分も含めてバイト代だしてやるから安心しとけ。」

「そ、そんなのは良いわよ。私はガンちゃんが困ってるって聞いたから手伝ってるんだしさ。」

「マイク越しにラブラブしてないで回復してくれよ。」

「ラブラブなんてしてないわよ。ほら、これでいいんでしょ？」

「サンキュ。桂ちゃんも結構操作に慣れてきたじゃん。」

「二週間毎日やってれば誰だってなれるわよ。」

どうやら俺が合宿に行っている間ずっとこいつらはダイブしていたらしい。このゲーセンでは有名人になった二人が一緒ということもあって、かなり強引に何度もコンテニューして迷惑をかけてしまっていたかもしれないが、それも平和のために仕方ないだろう。

「武器は手に入れたぜ。事情が事情だから何度もＬＶ２に行ってからなんて優兆なことはできないから、俺の持ってる薬草全部やるから戻ってきたらすぐにＬＶ４に潜るぞ。」

「はぁ？ＬＶ４なんて私行ったことないわよ。」

「問題ない。俺一人でも正直クリア可能だからな。とにかくのんびりしてられないんだ。」

俺がそう言うと、ちょうどＬＶ２ダンジョンをクリアし終えた三人は第二の街からセイラへと転送されてきた。

「ちょっと、事情の説明もなくいきなり行ったこともないダンジョンなんてありえないわよ。」

「事情はＬＶ４に入ってから説明するから、さっさと行くぞ。」

ＬＶ４ダンジョンに入ると確かにモンスターがあふれださんばかりにひしめいていた。俺がスタンダードランスで薙ぎ払いをすると、突きもしていないのにモンスターたちは死んでいくのをみて、ようやく桂も俺がいれば問題ないといった意味を理解したらしい。空から飛んでくる敵には、新しくスナイパーとなった要が撃ち落として、少なくなったところをこちらも俺と一緒で切れ味がＬＶ４ではありえないほど着いている武器を手にした幹久が掃除していく。

「ネズミあんたそんな武器を隠してたのね。」

「世界の平和を守る戦いまでにミスって死んじまったら問題だからな。」

「昨日まで使ってた武器はどうするのよ？」

「また今度誰か欲しがってる奴にでもくれてやるよ。あれだって一応かなり切れ味がついてるからな。」

「ねぇ、私が来たこともないすっごいダンジョンなはずなのに、私ヒールしなくても野兎の回復で十分回復してない？」

「一応ヒール頼むよ。俺たちの目指している場所はもっと上だから、今のうちに薬草のためのお金を貯めないといけないからね。」

「了解。じゃあいつも通りライフが減ったらすぐヒールでいいのよね？」

「そういうこと。」

俺たちがＬＶ４ダンジョンに潜った時にはあれほどあふれていたモ

ンスターたちが２０分もすると随分と減ってきて、ついにボスまでたどり着いてしまった。

「幹久、こいつってどうやって倒すんだったっけ？」

「ガンちゃんが接近戦でチクチクやって俺が光玉つかってズバッと切り裂く方法だったはずだぜ。」

「悪いんだけどＬＡだけは絶対に俺にくれないか？ＬＡ俺がとらないともう一度ＬＶ４ダンジョンをやり直すことになるからな。」

「そういうことか、だから約束の期限を守っていたにも関わらずモンスターが現実の世界に出てきたんだね。」

「そういうこと。前回は偶然ＬＡを要がとっちまったから、それでＬＶ４が生き返ってこんなことになっちまったんだ。」

「了解したよ。」

ボスのライフが減るまでは前回と同じように攻めようと思ったが、武器の切れ味が半端なくあがっていたため、ほとんど一人で倒してしまった。

「ふぅ。これでとりあえず外の世界は安心のはずだぜ。次はＬＶ３ダンジョンだな。」

「ちょっと、ＬＶ４ダンジョンに入ってから説明するって言っておいて、全然ちゃんと説明してくれてないじゃないの。きちんと説明してよね。」

「あ、わりい。敵を倒すことに集中して説明してなかったな。」
俺たちは街にでて鍛冶屋で武器を鍛えながらピルルから説明された今の状況を説明した。ＬＶ４ですら簡単にクリアできたので、ＬＶ３ならそれほど難しくないだろうということになって、ＬＶ２に行って兎を取ることもせずに俺たちはＬＶ３ダンジョンに潜るとＬＶ４と違い敵の数もそれほど驚異というわけでもなかったので、１０分ほどでクリアしてしまった。

「しかしお前ら二週間でよく切れ味３０の武器を作れたな。」

「そんなに難しくなかったよ。前と違って第二武器が限界値まで行っている幹久がいたからね。幹久をガンちゃんのポジションにして、俺が幹久の代わりに中堅守って後ろから桂ちゃんが回復をしてくれたらＬＶ３ダンジョンくらいまでは結構サクサククリアできたんだよ。」

「もちろんＬＶ２に三回潜って野兎を取るのは忘れなかったぜ。」

「なるほどな。しかしおかげで今回もＬＶ７ダンジョンがクリアできそうだぜ。外の奴らをうならせるためにはＬＶ８もクリアしたいところだがな。」

「そうだね。できればＬＶ８をクリアして今の上級者たちに並ばないと流石に独占し過ぎたから示しがつかないね。」

「ん？てことはＬＶ８をクリアした奴はいるのか？」

「一応ね。ＬＶ６と７ダンジョンの難易度が下がった影響で今までＬＶ６でくすぶっていた上級者たちがＬＶ８までたどり着いたんだ

よ。でも最近またＬＶ７の難易度があがってミスって死んで武器の切れ味が落ちたって話を聞くけどね。」

「ああ、さっきも言ったがＬＶ３４５７のボスは復活しちまったみたいだからな。」

「それじゃあ仕方がないね。」

俺たちはそんな会話をしながらも全員の武器が鍛冶屋で鍛えられたのでＬＶ５へと向かう。桂と要の武器は、結構お金が必要になったが、薬草を節約できる分お金に余裕があった幹久が売れる武器を渡してことなきを得た。

ＬＶ５の敵も俺と幹久からしたら既に雑魚認定してもおかしくないくらいの状況となっており、サクサクと倒してボスまで着くと、ＬＡをとるため、外で見ているだろうギャラリーのためにと俺が一人で倒すこととなったので、ボスをうまいこと撹乱して倒して見せると、マイク越しに幹久からそとでは拍手喝采だったと教えてもらう。

「とりあえず、ＬＶ３４５とクリアしたから外の世界にモンスターがあふれるという一番の危機は去ったが、ＬＶ７をクリアするにはちと荷が重いよな？」

「そうだね。鍛冶屋で武器を鍛えたいっていうのもあるし、このままＬＶ６に乗り込むのはどう？四回行けば雪兎四匹でＬＶ７なんてガンちゃんがいれば簡単にクリアできるんじゃないかな？」

「じゃあ桂と要の武器を鍛えるためにもＬＶ６を四回行くとするか。薬草が足りない奴はいないか？今なら配ってやるぜ？」

元々自分でライフを回復できる桂は必要なかったが、武器にまだ吸収が付いていない要が欲しいといってきたので、要に今持っている薬草を全部あげる。ＬＶ４がモンスターであふれていたので大量の薬草が手に入っていたため、要がこんなに入らないと言ったので、一応ということで桂に一束上げた。桂はマイク越しに嬉しそうにしていたのでそれもいいだろう。

ＬＶ６に関しては前に三回もクリアしている俺たちがいるし、前とは違い後ろで回復をしてくれる桂もいたのでかなりサクサクと４回クリアしてしまい。１時間ほどでＬＶ７ダンジョンに潜れる状態へとなった。

ＬＶ６ダンジョンに四回も行き、鍛冶屋で武器を鍛えた俺たちにとってＬＶ７ダンジョンはもはや脅威とはなりえず、ＬＶ７ダンジョンもサクッとボスまでたどり着き。ボスの影響でモンスターが増えていたこともあり、俺の薬草の数は大量にあったのでランサーのまま薬草を大量に使いながらボスに突貫したら、意外とあっさりＬＡも取ってＬＶ７をクリアしてしまった。ボスに突っ込む時はそろそろ終わってもいいかなという気分だったのだが、薬草とビショップのヒールがあれば捨て身攻撃も可能だという変な攻略方法をおしえてしまう結果になってしまった。

武器情報【7】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋９９限界値
基本攻撃力１１４（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ＋１０）
マジックランス＋２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
スタンダードボウ＋９７
基本攻撃９８（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）
スタンダードソード＋３０
基本攻撃力３５（使用不可だが幹久から一応と渡される）

カナメンさん
スタンダードナックル＋７３
基本攻撃力８３（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ハードナックル＋２０限界値
基本攻撃力３５（連撃）
スタンダードガン＋７３
基本攻撃７５（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
リボルバーガン＋２０限界値
基本攻撃力３０（固定ダメ）

？

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋９９
基本攻撃力１０９（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ロングソード＋２０
基本攻撃力３５（範囲増加）限界値
スタンダードメイス＋９９
基本攻撃力１０６（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ）
ヘビーメイス＋２０
基本攻撃力３５（ダメ増加）

ツバサ二号さん
ロット＋７３
基本攻撃力７４（敵に火の玉をぶつける）
アイスロッド＋２０
基本攻撃力３０（氷の攻撃で敵を少し足止めする）
スタンダードクロス＋７３
回復力７３（聖なる光で味方を癒す）
メディカルクロス＋２０
回復力２１（回復と同時に味方の状態異常を治療する）

LV8

四人ＰＴで雪兎も四匹いて、薬草などの消耗品も充分にそろえられた俺たちは、ＬＶ８ダンジョンも攻略することにした。ただし、あまりにも長時間プレイになってしまったので、これが終わったら前回と同じように倉庫に武器を預けてゲームを一旦止めることにしたが。

「なぁガンちゃん。俺らの武器ってこれ以上鍛冶屋であげれなくなっちまったな。」

「俺はまだ弓を少しあげれるが、これももうすぐ鍛冶屋いらなくなるな。」

「そうなるとガンちゃん手持ちのお金が増えすぎるだろ？そんな大金を現実世界に持って帰ったらえらいことになるし、わざともう一個新しい武器でも鍛えてお金を少し削った方がいいと思うぜ。」

「そうだな。前回も大金をゲーム機内に散らかして散々な目にあったし、それもいいかもしれないな。」

ＬＶ７の報酬も高く、ＬＶ８ダンジョンをクリアしたあと、どうにかしてお金を使う方法を考えないと、かなりの高額を持ち帰ることになってしまう。

「まるで宝くじを当てるような感覚だな。しかし大金を手に入れたらどうやって使う？」

「貯金するに決まってるだろ？」

「そうよ。ガンちゃんはあんた達と違って浪費家じゃないんだから、将来のためにとっておくのよ。」

「桂ちゃん。それじゃあまるで二人の将来のために貯金するって言ってるみたいに聞こえるよ。」

「うふふ。それもいいかもしれないわね。」

「ちょま。桂お前・・・」

「どうする要？今年の賭けは俺らの負けみたいだぜ？」

「そうだね。でもまぁお金に関してはスポンサーがいるんだから今回くらいは負けてあげようよ。」

「ん？どういうことだ？」

「と、とにかくＬＶ８ダンジョンに行こうよ。どうせ敵が大量発生するんだから、一気に進まないでゆっくり時間をかけて進もう。」

「ああ、それはいいけど、何でこんな大量の水筒が必要なんだ？」

「行けば解るよ。お金に余裕があったから、かなり大量に購入したから急ぐ必要はないからね。」

「あ？ああ・・・」

ＬＶ８ダンジョンに潜ると水筒のありがたさが分かった。ＬＶ８ダ

ンジョンはＬＶ６ダンジョンとは正反対で火山の近くなのかものすごい暑いダンジョンだった。前回来た時は死ぬつもりだったから水筒なんていらなかったが、幹久いわく５分に一回水分補給をしないとライフが減りだすんだとか。

しかし、大量の水を確保した俺たちは無理に進むことはしないで、薬草の消費をできるだけ抑えて桂の回復で間に合うように進んで行った。

「桂ちゃん良いの？あの岩倉翼だよ？結婚したら桂ちゃんも岩倉翼になっちゃうんだよ？」

「ガンちゃんから聞いたの？確かにあの時はいいわけがそれしか思いつかなかったからそんな風に断ったけど、今のガンちゃんなら私が断る理由がないじゃないの。」

「それはそうだけどよ。それにしても、女になったらオッケーなんて軽過ぎだぜ。」

「それだけが理由じゃないに決まってるじゃないの。あれだけ私のことを好きって言ってくれたんだもの、男の子でもガンちゃんなら良いかなって最近は思っていたのよ。」

「おいおい、ってことは今回のことが無くっても近々俺たちの賭けは負けてたってことか？毎年の翼会議の賭け金は俺たちのものだと思ってたのに。」

「まぁね。その時は事前に知らせて二人には負けないようにしてあげる気ではいたけどね。」

「流石、桂ちゃんだよ。俺たちのこと解ってる。」

「越後屋たちよ。そちらも悪よのう。」

「「お代官様ほどでは。」」

「「「あ～はっはっは。」」」

お前ら三人とも・・・戦闘中は無口になってるから聞いていないと思ってるんだろうけど、ちゃんと聞こえてるんだぞ？ＬＶ８終わってゲームをやめたら覚えてろよ。あのあほどもは、俺の気持ちを知っていて翼会議なんてわけわからないものを開いて毎年俺が桂のことをあきらめるかどうか賭けていたんだな。そして桂もそのことを知っていて掛け金の何割かをピンはねしてたんだろう。

「ガンちゃん。敵をさばききれてないよ。こっちは女の子が一人いるんだから、ちゃんと前衛で倒してよ。」

「うるせぇ。これでも一杯一杯やってらぁ。」

「がんちゃん。私精一杯回復するから頑張ってね。」

「お、おう。」

桂の声援でやる気出してさっきまで以上に敵を寄せ付けないように退治していく俺って・・・。

ＬＶ８ダンジョンの敵モンスターは連続攻撃をしてくるわ、数は多いわでかなり苦労したが、武器もきちんとしたものを持っており、桂が後ろから回復してくれることもあって案外サクサクと進むこと

ができた。以前幹久が絶対に固定ダメージには理由があると言っていたが、本当にアメーバ状のモンスターが幹久の固定ダメージの付いていないライトウォーリアーの武器で切り付けても倒せずに、そいつが出た時はジョブチェンジをするようにしだした。ずっとヘビーウォーリアーでも良いと言ったのだが、元々のダメージがかなり高くなっているので、できるだけステップワークで回避したいんだとか。

幹久も要も俺と違ってゲームのキャラを操作しているはずなのに、既にその動きは俺に近いものがある。まぁ実際一番近くで俺の動きを見てきたからというのもあるんだろう。そう考えるとまだまだ桂の動きはぎこちないが、これでも二週間毎日特訓したらしく、そこまで悪くはない。

「そろそろボスだぞ。今度のボスはどんな奴なんだ？」

「攻略した人によると、雑魚モンスターみたいに連続攻撃をしてくるボスみたいだぞ。流石のガンちゃんもこいつは回避するのが難しいだろうから無茶しないでね。」

「了解。ＬＡさえとらせてくれたら俺は何も問題ないぜ。今回は薬草も普通に使ってたから薬草使い忘れるなんてへまはしないだろうしな。」

ＬＶ８ダンジョンにはモンスターがあふれていたし、敵の攻撃が連続ということもあって、パターンを呼んでできるだけ避けるようにはしていたが、時々ラッキーパンチのようなものを食らってしばしば薬草を使う機会があった。

「あのねぇ。あれだけ大量の敵がいてあれだけしか薬草を使わない

ってすごいんだよ。桂ちゃんが楽できていいとはおもうけどね。」

「べ、別に桂のためだけに頑張ったわけじゃねぇよ。」

「そうそう。ガンちゃんは俺の下僕だからな。俺のために働いたんだぜ。」

「下僕はご主人に給料を払うはずがないから幹久には今回は無料でいいな。」

幹久が調子にのっているので、釘をさしておいた。幹久も要もおれよりも余裕のある生活を送っているが、それでもここ最近はリアルダンジョンでもうけたお金があったので随分楽しい思いをしていた。その分お金が無くなったらきっと困るだろう。

「がんちゃぁぁん。よ、社長・大統領・太っ腹。」

「太いとか女に向かって言うな。」

「す、すまん。とにかく下僕発言は取り消すからお金は援助してくれ。欲しいゲームがあったから限定発売のやつをもうすでに申し込んじまったんだ。」

「はいはい。わかったぜ。」

ピルルの言っていたことは本当らしい、時間にすると数時間しかゲームに入っていないはずなのだが、それでもどんどんゲーム内の体に心が引っ張られている気がする。合宿で師範代にはバレたがそれ以外の人たちには隠し通せたのはまだ女の子と男の子との間にいたことが大きかったのだろう。詳しく自分の体を見る勇気はまだなか

ったが、それでも男性としての部分がまだまだ沢山残っていたことは確認済みだったのだが、今度現実世界に帰った時はそれも変わっているかもしれない。

「ところでさ。クリア後の鍛冶屋での追加効果どっちだとおもう？」

「んなの連撃に決まってるだろ？ブログにもそう書いてあったじゃねぇか。」

「そうかな？あの文章だと明らかに釣りくさくなかった？俺はダメージ増加だとおもうけどなぁ。」

「じゃあ賭けるか？」

こいつらは賭けごとが好きだ。俺は賭けるためのお金が無かったので今まであまり参加していなかったが、賭けごとの対象になっていたことは先ほどの会話で間違いないので、あとで何かしらのペナルティは必要だろう。

「いいよ。俺はダメージ増加で幹久は連撃ね。」

「なにもつかないって可能性もないかしら？」

「む・・・確かに。何もつかなかったら引き分けにしよう。」

「良いぜ。」

「お前らの言うことはよくわからん。」

何かについて賭けたらしいことは解ったが、それが何についてかは

俺には解らなかった。リアルダンジョンに関係がありそうなことはなんとなく解ったが、それでも全部理解することができなかった。

「結構簡単なことだぜ？今まで追加されてきた効果は全部第二段階の武器のどれかだっただろ？」

「なるほどな。そう考えるとランサーってすっげえ恵まれてるよな。吸収が二段階武器でついちまうんだもん。」

「どあほう。遠くから攻撃できるアーチャーでなんとかＬＶ７をクリアした人がいるからその人は今頃ランサーしてるかもしれないが、基本的にランサーってのは防御ができないし接近しないと攻撃できないんだから、ガンちゃん以外にランサーをメインで使える奴なんていないんだよ。」

「なんでだよ？多少攻撃力が落ちても吸収すればいいじゃないか？」

「吸収で回復する量を考えてみろよ。盾で防御している俺ですら薬草が必要なのに一撃で倒すことで被ダメを避けるしかないランサーがマジックランスなんて使って普通はクリアできないっつの。」

どうやら俺が今までやってきたことはゲーム内ではかなり非常識なことらしい。マジックランスの回復があれば時間さえかければ進めるんだとばかり思っていたが、そう言われてみれば幹久も要もダンジョンに入った時にあんなに沢山持っていた薬草が野兎や雪兎がいるにも関わらず減りまくっていた。

「そんなもんなんだ。だったら兎の回復で間に合わせてスタンダードランスで一撃で倒せばいいんじゃないのか？」

「それこそ回復よりもダメージの方が多くなって薬草が切れて終了だっつの。」

「う～ん。とにかく俺以外にランサーできる奴はいなかったってことか？」

幹久や要の動きを見ていると俺と同じ動きができてもおかしくないのではと感じてしまうのだが、それでもゲームの中に入って肌で危険を回避できる俺とそうでない普通の人とでは難易度が随分違うらしい。

「もうそれでいいぜ。そろそろ雑魚も減ってきたしボス行かないか？こうしてボスの前で止まってるだけでも敵が出てくるんだしよ。」

「できるだけ多くの雑魚モンスターを倒しておいた方が二回潜らなくていいんだけどな。じゃあ水筒を一個つかってボスに行くか。」

「「おう。」」

要と幹久から良い返事が返って来たので、俺たちはボスのいる場所へと歩みを進める。ＬＶ８のボスは今までのボスよりも攻撃の間隔が狭く、確かに最初は避けきるのが難しかったが、絶対距離みたいなものを見つけると、ダッシュジャンプまたはスライディングをして一定距離まで下がることによってさほど怖くはないボスとなってしまい。ライフが少なくなったら他の三人には間違ってＬＡを取らないようにケンセイのみにしてもらい俺のダッシュジャンプ下段突きのコンボが決まってボスを倒すことに成功した。

ボスを倒した瞬間、俺はいきなり強い頭痛を感じた。頭痛の中、何かが見えた気がしたが、三人が街に出て俺のことを待っていたので、何くわぬ顔で合流した。

「相変わらずあり得ない動きするぜ。追加効果無しで連撃と同じような状態なんじゃね？」

「いやいや、連撃はもう少し早いし、素早く二回攻撃するのと一回の攻撃が二回分なのは違うよ。」

「とにかく、街でお金の調節をしたらさっさと戻ろうぜ。これでも合宿からかえってきたばっかりで疲れちまったからさ。」

「そうだな。」

街に着いた俺たちはその街の以前までとは違うところに驚いてしまった。

なんと、武器屋が存在したのだ。そしてその武器屋の主人はすごい頑固者で、武器を大事に扱える奴じゃないと絶対に武器を売らないと言いだし、手持ちの武器が全て鍛冶屋で限界値まで達していない人間には武器を売ってくれない仕様になっているらしい。俺は弓を鍛冶屋で鍛えるとすべて限界値になり、しかも資金が豊富だったため、幹久と二人で試しにそれぞれ一つずつだけだが買うことにした。

「すげぇ。勇者の槍だってよ。ものすごい強いぞこれ。」

「フムフム。スタンダードランスの効果をそのまま受け継いだ様な槍になってるわけだな。鍛冶屋に持っていかないでも攻撃力１００超えてるとかありえねぇぜ。んでもって、連撃以外の追加効果がついてるわけだ。ってことはさ。次の町で連撃をつけたらもう一度買い直しってことか？」

「さぁ？そこら辺は俺にはわからん。」

「そうだな。ガンちゃんに聞いた俺が馬鹿だったよ。ＬＶ８をクリアした人の情報にこんなの乗って無かったけど、こいつはわざと情報を隠しやがったな。」

「そうなんじゃないかな？ここまでクリアするような人だったら、普通鍛冶屋の効果は９９になってるだろうからね。ＬＶ８の途中でコンテニューしてたら買えてはいないかもしれないけど、武器屋があるってことくらいはみんな見てるはずなのに情報が流れていないのは第三武器の情報をわざと隠した人がいるとしか考えられないね。」

「とりあえず、今回はかなり収穫があったことだし、そろそろ終わろうぜ。倉庫に行って武器預けたらこのまま死んでも問題ないくらい適当な金額になったしょ。」

「そうだな。帰ったらその２００万円でパーっとうまいものでも食いに行くか。」

「おいおい、俺の金だと思って・・・」

「ガンちゃん。私ステーキが良い。」

「仕方がないな。」

俺たちは倉庫にスタンダード武器を預けると、デスペナの関係ない武器だけを手にＬＶ９ダンジョンに入った。勇者の槍はどうなるのか分からないから倉庫にとチキン幹久と要が言っていたが、どれだけ強いのか見てみたいという桂の言葉に従ってＬＶ９に持って行く。もちろん幹久は刀を預けてしまったが、案外これ一本でＬＶ９もク

リアできちゃいそうな勢いだった。三人が薬草を使わずに死んでいったのを期に、俺もわざとマジックランスに持ち替えて殺され現実世界へと帰っていく。

武器情報【8】

プレイヤー武器情報（ウォーリアーの盾は鍛冶屋不可のため省略）
がんちゃんさん
スタンダードランス＋９９限界値
基本攻撃力１１４（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
マジックランス＋２０限界値
基本攻撃力４５（吸収）
勇者の槍＋８
基本攻撃力１０８（スタンダードランスの能力をすべて引き継ぐ）
スタンダードボウ＋９９限界値
基本攻撃１００（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ピアッシングボウ＋２０限界値
基本攻撃力２８（貫通）
スタンダードソード＋３８
基本攻撃力４８（使用不可だが幹久から一応と渡される）

カナメンさん
スタンダードナックル＋８１
基本攻撃力９１（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ハードナックル＋２０
基本攻撃力３５（連撃）限界値
スタンダードガン＋８１（特徴：弓と比べて連射が遅い代わりに遠くから攻撃可）
基本攻撃８３（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）

リボルバーガン＋２０
基本攻撃力３０（固定ダメ）限界値
？

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋９９
基本攻撃力１０９（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ロングソード＋２０
基本攻撃力３５（範囲増加）限界値
刀＋８
基本攻撃力７３（スタンダードソードの上位版である。）
スタンダードメイス＋９９
基本攻撃力１０６（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ヘビーメイス＋２０
基本攻撃力３５（ダメ増加）

ツバサ二号さん
ロット＋８１
基本攻撃力８２（敵に火の玉をぶつける）
アイスロッド＋２０
基本攻撃力３０（氷の攻撃で敵を少し足止めする）
スタンダードクロス＋８１
回復力８２（聖なる光で味方を癒す）
メディカルクロス＋２０
回復力２１（回復と同時に味方の状態異常を治療する）

現実世界F

現実世界へと帰ってきた俺にはそれこそ俺にとってリアルダンジョンでずっといた方が良いと思えるほどの試練がまっていた。

「がんちゃん。着替えた？やっぱり私が中に入ってきちんと着させてあげようか？」

「いや、いいから。頼むから中に入ってこないでくれ。」

まず、今まで避け続けてきた下着などを桂によって用意されていた。ゲーム機から出た時につけていないことを一瞬で見破られるとトイレへと連れていかれ、今、俺はきちんと下着までつけることを義務つけられた。俺は格闘技をする人間として柔軟な体つくりをしてきたので背中に手が届かないということはなかったのだが、それでも渋っていると、私がつけてあげると桂がトイレの外から声をかけて来るので仕方無く全てを着こなすとドアを開ける。

「フムフム。やっぱりがんちゃんは女の子でも可愛いと思ってたのよ。さぁ次はこっちよ。」

「ちょま。もうこれ以上は・・・」

「なにを言ってるのよ。大学生にもなってメイクの一つもしないで外に行くなんてお姉さんはそんな子に育てた覚えはありませんよ。」

「いつから桂が姉になったんだよ。」

「そうよね。ガンちゃん、私のことはお姉さんって呼んでもいいのよ。」

「ば、馬鹿を言うな。そ、そんなこと言えるわけないだろ。」

「じゃあ、なんて呼びたいの？」

「えっと・・・それは・・・」

「じゃあ、呼び方が決まるまではお姉様と呼びなさい。今日からがんちゃんが女の子として生活できるように一から指導していくわ。」

「ええ？そ、それはちょっと・・・」

「そんなこと言ってもがんちゃんずっと男の子として生きてきたんだから、女の子のことなんて分からないでしょ？大丈夫、ちゃんと優しく教えてあげるから。」

そう言って、桂に優しく抱きしめられた。男の時にはこんなスキンシップなんてしたことがなかったので俺はドキドキしながらも、首を縦に振り桂の提案を承諾してしまうのだった。
そこからは、トイレの外で待っていた幹久と要も誘ってご飯を食べに行くと、自然と俺のアパートまで桂が着いてきた。

「本当にあのゲームの影響で有名人になっちゃったのね。」

「そうだな。ゲーム機から出た後も質問攻めにあっていたが、あのゲームは相当難易度が高いらしく、あれをクリアできるってのはかなりゲーム好きには尊敬できることらしいな。」

「ほら、またそんな言葉使いをする。ちゃんと女の子らしい話し方をしなさいっていったでしょ。」

「そんなこと言っても急にはかわらねぇよ。」

「まぁいいわ。次にゲームをする一週間まで時間はたっぷりあるんだもの。それまでに私がみっちり指導してあげるわ。」

「はいはい。お任せしますよ。ところで桂の家ってこっちじゃないよな？」

「え？何を言ってるの？今日からがんちゃんのアパートで一緒に暮らすんじゃないの。」

「えええええ？？？？」

桂が当然のようにそう言ってきたことに俺は驚いたが、桂は当然のことのようにそう言うと、今持って来ている荷物は少ないが、明日には届くように既に配達しているという。こうなっては押しの強い桂を俺が説得することは不可能で、そのまま一週間俺は桂に一日中、大学は違うので大学の講義を受けている時間を除いては全ての時間を桂と共に過ごすことになったのだった。

「がんちゃん。今日の晩ご飯はカレーでいい？」

「ああ、ってか俺が帰ってきたら作るからよかったのに。」

「いいじゃないの。二人のうち先に帰った方が準備をすればいいでしょ？」

「確かにそうだな。ところで、その部屋着はどうにかならないのか？」

「女の子同士なんだから良いでしょ？」

「まぁ一応俺も女の子になったんだが、元は男だぞ？襲われたりとか怖くなったりしないのか？」

「あら？ガンちゃんにそんな勇気あるの？別に私は構わないけど、どっちかっていうと私がガンちゃんを襲っちゃうかもよ？」

「ちょま・・・」

「がんちゃん。元気だった？」

「とっても素敵な一週間だったわよね？」

「そりゃ桂ちゃんからしたら願ったりかなったりだった一週間かもしれないけど、がんちゃんはそれで良かったの？」

「良かったかと聞かれたら良かったんだけど、もう戻れないと思うと少しさみしいぞ・・・」

「戻らなくてもいいのよ。常に未来を見て生きていかなきゃダメよ。」

「桂、お前の趣味に走りまくった一週間だったんだな？」

「そ、そんなことはないわ。ちゃんとがんちゃんの意見も取り入れていたもの。」

「そうみたいだね。話し方とかはまだ前のままみたいだし。桂ちゃんだったらお姉さまとか
呼ばせて妹キャラみたいにするかと思ってたけど、そこら辺は大丈夫みたいだね。」

「「・・・」」

「二人っきりの時はお姉さまと呼ばされてたり？」

「うん。」

「か、桂ちゃんって鬼畜だねぇ。」

「そんなことないわよ。すっごく可愛がってるんだから鬼畜だなんて心外だわ。」

「可愛がってるのは解ってるよ。」

「確かにそうだが、それにしても洗脳しすぎだぜ。」

俺の前で幹久と要と桂が「うふふ、あはは」と怪しげな笑い声を上げている。どうやら、俺たちは一週間という時間を色々な意味で桂の趣味に走った教育を受けながら過ごしたらしい。

女の子のことなど分からなかった俺は、桂の指導のまま女の子というのはこういうものなのだと思ってきたが、半分以上が桂の洗脳だ

ったらしい。

「まぁ、どっちにしろ女の子のことなんて全く分からなかった俺が桂のおかげでたすかったのには変わりはないんだからいいんじゃないか？」

「が、がんちゃんがそれで良いならいいんだけど・・・」

「そうだな。ガンちゃんが幸せなら俺たちがいうことは何もないぜ。」

「それよりも、さっさとこのリアルダンジョンをクリアしちまおうぜ。そうしないといつまでたっても俺たちの世界は危険でいっぱいなんだからな。」

「でもよ。このゲームをクリアしちまうのはもったいなくないか？お前らこの一週間バイトしてないのもこのゲームのおかげなんだろ？」

「まぁ確かにバイトはしてないけど、それは俺が女の子になっちまったから今のバイト先に行きにくいからやめたってだけだからな。きちんと女の子でも採用してくれるところを探すさ。」

「う～ん。今までと違って色々大変になるだろうし、落ち着くまでの資金を今回は持って帰るようにしようか？」

「まぁそれもいいな。と言っても、もうＬＶ９だろ？武器の切れ味ももうすぐ全員が限界値行くんだから最強武器を手に入れてＬＶ１０ダンジョンクリアしたら終わりなんじゃねぇのか？」

「一応そうなんだけど、四人プレイを推奨しているゲームだから、俺たちが最強武器を取ってＬＶ９ダンジョンをクリアするところまでで今回は終わっておこうよ。」

「ＬＶ１０は次回に持ち越しってわけだな。」

「そういうことだ。」

俺たちは今日の方針を話し終わると、ゲームセンターに入っていく。普段なら順番を待ってはいらなければならず、皆ＬＶ６ダンジョンやＬＶ２ダンジョンで兎を取ってから攻略を進めるためその待ち時間はかなりのものになるはずなのだが、俺たちがゲームセンターに入ったことが伝えられると、きりのいいところで前のＰＴの人たちが倉庫に武器を預けて交代してくれた。俺たちも毎回長時間プレイをしてみんなのゲーム進行を妨げるわけにもいかないので、ＬＶ９をクリアしたらやめるというのも良いことだろう。

勇者と妖精γ

ピーピーピピピピッピ！

「認証番号一致、リアルダンジョンにようこそ。あなたの名前はガンちゃんさんですね？今からリアルダンジョン始まり都市、セイラへ転送いたします。」

「おまちしていましたっぴ。」

「一週間ぶりだなピルル。」

「はい。ちょうど一週間ぶりですっぴ。」

「ボスの様子はどうなってるんだ？」

「勇者様がＬＶ８までをクリアしてくださっていたおかげで今回はＬＶ８のボスまで復活しただけで、ＬＶ９、ＬＶ１０の最終ボスの三匹しかいなくなったっぴ。でもＬＶ１０のボスの様子が最近おかしいので気をつけて欲しいっぴ。」

「ああ、今回はＬＶ１０のボスは倒さないんだ。悪いがこう何度も長時間プレイを続けることもできないからな。」

「それは残念だっぴ。そういえば、勇者様の専用ランスを手に入れたみたいっぴね。」

「ああ、あれの効果はどんな効果なんだ？」

「最初の武器の効果をすべて受け継いでプラスで切れ味をつけられるっぴ。勇者の槍には他の武器とは違うすごいところがたくさんあるって女神様がいっていたっぴ。」

「なるほど、ランスは他の職よりも攻撃力が高いから一撃で倒せる敵もおおいとかあるのかもしれないな。」

「そうだっぴ。」

「ところで、俺はこの世界についてあんまりにも情報をもってないんだが、そろそろこの世界について教えてくれないか？」

「お仲間は大丈夫っぴ？」

「あいつらは先にＬＶ２に兎を取りに行ってもらってるから、前と違ってゆっくり話を聞くって伝えてあるしな。」

「解ったっぴ。この世界について少し長くなるけど教えるっぴ。」

そのあとピルルから聞いた話は衝撃的な内容だった。そして俺はＬＶ１０のボスを倒すまでに決めなければならないことができてしまった。

「おまたせ。かなり待ったか？」

「そうでもないよ。ガンちゃんが来るまで、ＬＶ２で兎を取ったあとは、ＬＶ５までは私たち三人でもクリアできるからって順番にダンジョンに行ってお金を貯めて第三武器を買うための資金をためてたもの。」

ＬＶ２ダンジョンにも行ったらしく、野兎もいるが、桂はさておき幹久も要も上級者だ。特にゲームというものに慣れ親しみまくっているこいつらにかかればＬＶ５くらいは余裕らしい。それでもＬＶ３ダンジョンに行っていた辺りはチキンだが、お金が貯まることに関しては俺も賛成だったのでナイス判断としておく。

「そっか、とりあえず、今からＬＶ６に行って雪兎を取ったらＬＶ８とＬＶ９ダンジョンクリアしちまおうか。」

「了解したぜ。」

幹久が了承してくれたので、俺たちはＬＶ６ダンジョンを３回クリアするとＬＶ８ダンジョンに潜った。以前と同じくらい敵が増えていたのだが、勇者の槍を強化した俺の前にモンスターはあっさりと敗れると、他のメンバーも二回ほどの攻撃で倒せることもあって、１０分ほどでＬＶ８をクリアしてしまった。ＬＶ２ダンジョンで充分な薬草を拾っていたこともあり、十分な資金を手に入れていた状態になっていたので、きがねなく第三武器を買い。切れ味が落ちるといけないので初期武器を倉庫に預けてＬＶ９ダンジョンへと潜るのだった。

「ＬＶ９ダンジョンの敵はやばいな。流石に俺たちだけじゃどうしようもないぜ。」

「そうだね。がんちゃんがんばれぇ。」

「がんちゃん。私のところに敵を通しちゃダメよ。」

後で三人が文句とも声援ともわからない言葉を発しているがそれも

仕方がない。以前死ぬために来た時とはちがい、クリアするために来ているにもかかわらず俺がＬＶ６ダンジョンにもう一度潜るのを面倒がったために俺の周りには野兎しかおらず、薬草を使いながらの戦闘にあまり慣れていない俺がちょくちょく敵を後にこぼしてしまっているのだ。
そうはいっても、これだけのモンスターをさばき、後にこぼすモンスターが最低限であることには変わりはなく、普通にプレイすることを考えたら難易度はかなりさがっていることだろう。
俺たちは順調に薬草をまだ十分なだけ残してボスの前へと進むことに成功した。
「やっぱり吸収効果があるとはいえ、そろそろ雪兎無しではきついみたいだね。」
「ＬＶ１０ダンジョンはＬＶ９とは比べモノにならないくらい敵が強いらしいから、来週は絶対に雪兎を捕まえてこないとね。」
「まぁ外で見ている奴らは野兎がいる状態でＬＶ９クリアとかありえないとか思いながら見てるんだろうからいいんじゃないか？」
「まぁ確かにそうなんだけど、外の人たちは次こそは全クリを期待してたんじゃないかな？」
「まぁ今回は第三武器の切れ味ＵＰのための回だったって納得してもらうしかないさ。」
「どうせだったら、がんちゃんがダイブしない間に俺たちも第三武器の切れ味あげておこうか？本当に来週こそは全クリしたいでしょ？」

「いや、来週も一回切れ味を上げるためにダイブさせてくれ、ちょっとした事情ができたから、それ以外にも色々と準備する必要があるみたいだしな。」

「欲がないね。まぁそれががんちゃんのいいところでもあるんだけどね。でも、ピルルの説明だとＬＶ１０ダンジョンの敵を一撃で倒せるのはガンちゃんだけなんだから、ちゃんとガンちゃんの武器もあげておくのは賛成よ。」

いつものようにボスの手前で兎たちの回復を待ちながらできるだけ雑魚モンスターを減らす作業をしてボスのいる場所へと進む。
ＬＶ９のボスは俺たちの予想をはるかに上回る強さのボスだった。

「おい、幹久こいつはやばいから、下がってろ。」

「ふざけんな、お前一人でどうにかなるわけないだろ。」

「そうだよ。がんちゃんのサポートのために俺たちはいるんだから、がんちゃんは出来るだけボスの注意を引き付けておいてよ。」

「私の回復もあるんだから、そんな心配しないの。」

三人は今までのボスと同じように考えている様だが、今までの戦闘でも、俺の動きを注意深く見ており、まるでこいつ自体が頭脳をもっており、対策を練っているような気がする。

「やばい。みんな逃げろ。」

俺の声をあげるが、既に遅かった。全員ボスから離れるように移動

をしたが、俺とは違いゲーム内の動きではボスの攻撃範囲から完全に逃れることはできなかった。

「キャー。」

最初に狙われたのは、回復役の桂だった。明らかに今までのボスとは動きが違う。ボスも雑魚モンスターも攻撃を加えたキャラにターゲットを向けていたが、このボスはＰＴの動きを見て、まず倒すべき相手を選択したようだ。桂は俺たちの中でも一番動きが鈍く、薬草もうまく使えなかったために、すぐに死んでしまった。

「コンテニューをするまでにある程度時間がかかるから、しばらくは三人だね。」

「お前らも、もっとボスから距離をとれ、こいつはＰＴの弱点から攻撃してくるぞ。」

「弱点ってことは、次は要か？」

俺が要に注意を促すと、その考えは当たっていたらしく、今度は要の方に向かって突進してくる。

「ふざけんな。要を簡単に倒させたりしないぜ。」

「うおおおぉぉ！！」

間に合わないと判断した幹久が、ライトウォーリアーのまま要とボスとの間に体を滑り込ませると、盾を使ってボスの攻撃を防ぐ。

「このやろう！！」

要はその隙をついて、銃を構えると、ボスの顔に向かって弾丸を発射する。幹久と要の二人だからこそできたナイスコンビネーションだ。

「俺がこのままボスを引き付ける。その間に、要は距離を取ってもう一度態勢を・・・」

幹久は油断なく薬草を使ってライフを回復させていた。しかし、薬草で回復する以上の攻撃が幹久に襲いかかった。ボスの大きな体につぶされてしまった幹久はゲームから除外される。

「幹久ぁぁぁ！！」

俺は幹久が先ほどまでいた場所に駆け寄ろうとするが、その場所には当然ボスの大きな体があり、容易に近づくことはできない。

「幹久の仇は俺がとってやるよ。」

要はそう言って、距離を取りながらもボスに攻撃を加えていく。しかし、そんな要にもボスの毒牙が迫っていた。幹久と違い防御手段のないスナイパーの要に対して、ボスは無情にも、その鋭い爪を突きたて、要もついにはゲームから除外された。
俺は目の前で起きた三人の死が信じられない。まるで現実としか思えなくなって、頭が真っ白になる。真っ白になった世界に、突然ボスの影が揺らぐ。

※※※※※※※※※※※※※※※

俺は突然何もしらない世界に降り立っていた。

「ガールンド将軍、敵のボスが城壁をやぶって襲って来ました。」

俺はどうやらガールンド将軍という人物に乗り移ってしまったらしい。

「民を見殺しにはできん。第一大隊、何が何でも敵の城下への侵入を防ぐのだ。」

将軍の命令もむなしく、その敵は城下へと侵入し、大型のボスが出てきた。

「第二大隊ワシに続けぇ！！」

俺は体も何も動かせないまま、ガールンドと呼ばれた将軍の中で世界を見て行く。どうやら俺の意識はセイラの世界へ飛ばされ、この将軍の意識の中に入り込んでしまったらしい。

将軍は軍の先頭に立って、大きなモンスターへと走り寄る。近づくにつれ、大きいと思っていたモンスターの全貌が見え、俺はそのモンスターに嫌悪感を抱かずにはおれなかった。

街を襲い、モンスターを引き連れているのは、どう見ても先ほどま

で俺が闘っていたＬＶ９のボスだったのだ。

ボスの周りにいた雑魚たちを将軍は槍の一突きで葬り去り、ボスへと渾身の一撃を放つ。

「た、倒したのか？」

※※※※※※※※※※※※※

将軍の呟きが聞こえたような気がしたが、俺が目の前を見ると、ボスに渾身の突きを放っているところだった。次の瞬間ボスはエフェクトと共に崩れる。

「がんちゃんすごいね。最後の動きなんて、まるで本当の武将みたいだったよ。」

「え？あ、ああ。」

俺の意識がセイラに飛ばされている間に三人はコンテニューしてきたらしく、さらに俺はいつの間にかボスを倒していたらしい。
ＬＶ９をクリアした俺たちは、いつも長々と独占してしまったので、今回は素早く終わることにした。

「第三武器を買ってみて思ったんだが、勇者の槍だけやけに効果が高くないか？」

「このゲームの主人公はランサー&アーチャーだったんじゃない？確かに切れ味をプラス１０しただけでスタンダードランスを超えるのは異常に優遇されてるね。」

「あほいうな。普通の人間に勇者の槍なんて使えるわけないだろうが、ＬＶ９の敵のダメージ考えろよ。連撃してくる敵の一撃くらっただけでライフの半分近くもってかれるんだぞ？」

「そうだね。武道家はあれでも防御力が高いっていう効果があるみたいだから、ランサーほど喰らわないからね。やっぱり回避ができる人じゃないとランサーをできる人はいないだろうね。」

「ＬＶ１０だったら一撃死って可能性もあるんじゃないか？」

「雑魚敵の攻撃を全部くらったら死ぬとかそういう設定になってるかもしれないね。」

「ってことはガンちゃん以外にランサーできないってことかしら？やっぱりがんちゃんはすごいのね。」

「リアルダンジョンに認められた勇者だからな。俺たちもこのゲー

ムの世界に入りたいって思ってた時期もあったが、こうなるとがんちゃん以外が入っても無駄だっただろうね。」

「それなんだけどさ。もう一人リアルダンジョンに入れるっていったらお前らどうする？」

「え？本当？じゃあ、操作慣れしてない桂ちゃんが入るのがいいかもしれないね。俺たちは、ゲームはゲームのまま楽しめるしね。」

「いや、言い方が悪かった。きちんと外に出てから説明するぜ。とにかく今回は倉庫に武器を預けたら一旦ダイブをやめよう。」

俺は三人にそう告げると、さっさと街の倉庫がある場所まで行くとＬＶ１０ダンジョンをクリアするために必要な装備をすべて預けてしまった。俺のその様子を見た三人は大事な話があることを理解したらしく、素直に従うと、俺と共にＬＶ１０ダンジョンに潜った。切れ味低下の心配がない第二段階の武器だけを持った俺たちがＬＶ１０ダンジョンで生き抜くことはできず、俺もわざと攻撃を食らってみたりとどうやったらＬＶ１０ダンジョンを攻略できるかを考えながら戦ってみたが、ピルルの言う通り勇者の槍の強力な一撃で敵を倒せるとしたら、次にダイブした時はボスまで行けるだろうということが予測でき、俺たちは現実世界へと帰ってきた。

ＬＶ９ダンジョンで一番にしんでいた桂から、服を受け取ると、俺はゲーム機から出てくる。今回での全クリを期待していた周囲の人たちに、第三武器の存在とその効果について説明している幹久と要がいた。二人の説明に、ＬＶ１０ダンジョンの攻略がかなり難しいものであることを納得した面々は、この二週間でやけに難易度がさがったリアルダンジョンへとダイブしていくのだった。

そんな様子をしり目に、俺たちはゲームで手に入れたお金を持って、
また四人でステーキ屋
へと向かうのだった。

「やっぱりＬＶ１０ダンジョンの敵をもう少し倒しておくべきだったんじゃないかな？そうすればＬＶ１０ダンジョンの難易度も下がって、ＬＶ１０ダンジョンを誰かがクリアしてくれるかもしれないよ？」

「どあほう。あの敵の多さと強さをみただろ？今までと違って、努力でどうこうできるレベルじゃなかったじゃねぇか。第一、がんちゃん級のプレイヤー抜きじゃあＬＶ１０ダンジョンなんて攻略不可能だっつの。」

「そうだね。俺たちだって、正直１０匹が限界だったんだもん。たとえ最強武器を９９まで強化したとしても、それは変わらないと思うよ。」

「ランサと違って一撃で倒せるわけじゃないから、被ダメが圧倒的に下がるってことはないだろうな。それでも、今の武器をつかっているよりもはダメージを受ける確率が下がるのはまちがいないだろうけどな。」

「それなんだが、お前らでサイトに勇者の槍以外でＬＶ１０ダンジョンを一撃でできないって情報は流しておいてくれ、あと、できるだけ俺たちがもっている情報をみんなに公開しておいてくれ。」

「どうしたんだ？別に他人がどうしようが、俺たちがリアルダンジョンを攻略しちまえば平和になるんだろ？」

「そうも言ってられないらしいんだ。実際に俺が倒す必要もあるのだが、それと同時にゲーム事態をクリアする人も必要らしい。現実世界とセイラの世界の二つの場所でボスが撃破されることによって、ふたつの異世界の扉が完全にふさがれるんだそうだ。」

「なるほどね。まぁそいつに関しては、俺たちがなんとかしてやろう。ボスを倒したあとＬＡを俺たちが取るためにもう一度潜ればいいだけだしな。」

「ＬＶ１０ダンジョンは確かに俺たちみたいなバランスの取れたＰＴじゃないとクリアできないのは確かなんだが、俺がボスを倒せば今までのような難易度ではなくなる。普通にプレーヤーがクリアできる難易度になって、しかもそのあと裏面みたいな感じでどっちの攻撃も一撃で死ぬっていうＬＶ１０＋１ダンジョンってダンジョンに行けるようになるらしい。ここまでは良いか？」

俺が話を一旦区切ると、物わかりの早い三人は頷いてくれる。

「そしてここからが本題だ。さっきダイブを終わる前にもう一人ゲーム世界に来れるといったよな？あの話と関係してくるんだが、リアルダンジョンの向こうの世界はセイラっていうんだが、あの世界も現実と同じように世界があるらしく、ボスを倒したら向こうの世界に俺は引きづり込まれるらしい。そして、こっちの世界には二度と帰って来れないみたいなんだ。」

「そ、それってめっちゃくちゃじゃないか。世界を救った勇者様にそんなことするなんて・・・」

「ああ、俺もピルルにどなり散らしてしまったが、理由を聞いたらしかたがないと思うしかなかったよ。あっちの世界では普通にモン

スターとかが生きているらしい。しかしボスなんてものはいなかったんだと。そんで平和だった世界にいきなりこっちの世界との扉が開いちまって狭間の世界にいたボスたちにモンスターたちが操られだしてしまったらしい。」

「ってことはあのモンスターたちも根っからの悪者じゃなかったってことか？」

「いや、向こうの世界でもモンスターは驚異ではあったらしいぜ。まぁそこら辺の細かいことはいいとして、こっちの世界との扉を閉めてしまったら向こうは滅びるしかないってくらいの状況らしくって、俺はそっちの世界も救って欲しいといわれているんだ。」

「なるほどね。リアルダンジョンの世界はこっちと向こうの狭間で、狭間の問題を解決したら今度はこっちの世界も救えってか。」

「ああ、今のところ向こうの世界の将軍たちが一生懸命モンスターの進行を止めているらしいんだが、増加するモンスターにもってあと2カ月といわれている。しかし、俺はできるだけ早く解放してあげたいと思ってるから、再来週にはＬＶ１０ボスをクリアして向こうの世界を救ってやろうと思っている。」

「まぁまて、そんなに結論を急ぐなよ。確かに向こうの世界がモンスターであふれちまったらまた同じようにこっちの世界にモンスターがあふれ出してくるかもしれないって考えたらがんちゃんが向こうの世界にいかなきゃって気持ちもわかるさ。でもな、そうなったら残された俺たちはどうしたらいいんだ？」

「とりあえず俺がリアルダンジョンから持ち帰った金を使ってのんびり暮らしてくれよ。」

「いや、そうじゃねぇだろ。がんちゃんがいない人生なんてまっぴらごめんだぜ。」

「そう言ってくれるのはありがたいんだが、向こうの世界に渡れるのは俺も含めて二人だけなんだ。」

「ってことは一人は行けるってことだな。じゃあ、俺が行くぜ。この中で一番武器や装備が揃ってるんだから、当然だろ。」

「幹久じゃ無理だよ。ここは俺が行く。向こうの世界ってのは現実世界と一緒なんだろ？つまりノーコンテニューでクリアしなければ自分の死が待ってるってことだよね？不死身のがんちゃんはさておき、俺たちは決して死ぬことができないんだから、ここは一番敵から離れて攻撃できる俺が行くのが良いよ。」

「まって、それだったら、常に回復ができる私が行くのが一番じゃないかしら？不死身と言ってもがんちゃんも一週間は復活できないんでしょ？だったらがんちゃんが死なないようにフォローできる私が行った方がいいわ。」

「三人ともちょっと待って、確かに向こうの世界に行けるって言ったけど、行かなければならないってわけじゃないんだよ？俺は不死身だから何度だってモンスターに挑戦してなんとか向こうの世界を救って見せるつもりだし、その結果こっちの世界も救うさ。でも、三人を死の危険があるかもしれない場所に連れて行くなんてできないよ。」

「無理だな。だったら俺たちに向こうの世界に行ける可能性から話すべきじゃなかった。俺たちは何があってもガンちゃんについて行

くぞ。」

「ああ、もうわかった。じゃあこれ以上は何にもいわない。ただし、向こうの世界にもしついて来ちまった時は絶対に死なないことこれだけは守ってくれよ。」

「もちろんだぜ。」

キャラクター的に一番死亡率の高いウォーリアーをしている幹久が当然のようにして答えたので、そこで話は一旦打ち切りとなった。でそれぞれ向こうの世界にわたっても大丈夫なように準備をして、さらに幹久と要は俺のキャラも含む４キャラの第三武器の切れ味をＬＶ２ダンジョンとＬＶ５ダンジョンに何度も潜って上げたりと準備を進めてくれた。そうして迎えた二週間後、ついに俺たちはリアルダンジョンの世界を完璧にクリアすし、こちらの世界を旅立つ時がやってきた。

武器情報【9】

がんちゃんさん
スタンダードランス＋９９
基本攻撃力１１４（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加・連撃）
マジックランス＋２０
基本攻撃力４５（吸収）限界値
勇者の槍＋９９
基本攻撃力１９９（スタンダードランスの上位版である。）
スタンダードボウ＋９９
基本攻撃１００（追加効果貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加・連撃）
ピアッシングボウ＋２０
基本攻撃力２８（貫通）限界値
妖精の弓＋９９
基本攻撃力１２９（スタンダードボウの上位版である。）
その他にも向こうの世界でも使えるかもと多数の武器をある程度育てた状態で持たせてくれていた。

カナメンさん
スタンダードナックル＋９９
基本攻撃力１０９（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加・連撃）
ハードナックル＋２０
基本攻撃力３５（連撃）限界値
スタンダードガン＋９９（特徴：弓と比べて連射が遅い代わりに遠くから攻撃可）
基本攻撃１０１（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加・連

撃）
リボルバーガン＋２０
基本攻撃力３０（固定ダメ）限界値
黄金銃＋９９
基本攻撃力１２４（スタンダードガンの上位版である。）

ミッキーネズミさん
スタンダードソード＋９９
基本攻撃力１０９（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ロングソード＋２０
基本攻撃力３５（範囲増加）限界値
刀＋９９
基本攻撃力１５４（スタンダードソードの上位版である）
スタンダードメイス＋９９
基本攻撃力１０６（貫通・範囲増加・吸収・固定ダメ・ダメ増加）
ヘビーメイス＋２０
基本攻撃力３５（ダメ増加）

ツバサ二号さん
ロット＋９９
基本攻撃力１００（敵に火の玉をぶつける）
アイスロッド＋２０
基本攻撃力３０（氷の攻撃で敵を少し足止めする）

スタンダードクロス＋９９
回復力１００（聖なる光で味方を癒す）
メディカルクロス＋２０
回復力２１（回復と同時に味方の状態異常を治療する）
癒しの杖＋９９
回復力１１９（複数の味方に回復、状態異常も治療）
注）一人を回復ライフの１１９回復・二人を回復ライフの５９ずつを回復といった風に回復する。

現実世界G

「よし、四人とも合鍵を持ったし、四人とも遺書を書き終えたんだから問題ないな。」

「おう。誰が向こうの世界に行くことになっても、恨みっこなしだぜ？」

俺たちは一旦俺のアパートに集まった。向こうの世界に行くということは、こちらの世界では死んだことと同じことになってしまうので、残った二人はその言い訳のためにゲームが終わった後は一旦ここに戻ってきて失踪した云々を家族に伝える役目を負う。現実世界に残るものも向こうの世界に行くものも、互いにかなりのリスクを背負うというのに、この三人は俺のために許してくれたのだ。

俺はこの三人のためにも、他の世界の危機を知らない人のためにも、絶対にこことともうひとつのセイラの世界を救わなければならないと心に誓った。

「んじゃま、武器の切れ味は十分に上げといてやったから、さっさとダイブして雪兎を捕まえたらＬＶ１０ダンジョンに乗り込むとしますかね。」

「じゃあ、ゲームセンターに行くか。」

俺たちがゲームセンターに着くと、もう恒例となりつつある順番を譲る行為を受けた。俺たちが向こうに向かうために準備として潜った一週間前からＬＶ９ダンジョンまでクリアした人が増加したらし

く、ＬＶ１０ダンジョンをクリアできるだろう俺たちへの期待は日に日に大きくなってきていたのだとか。

「そんなにＬＶ１０ダンジョンは難しいのか？」

「難しいなんてレベルの話じゃないですよ。大量のモンスターに一発でも攻撃されたら薬草を二個は使わないといけないんですから、どれだけ薬草を買いこんでもＬＶ１０ダンジョンの攻略は不可能だといわれてるんですから。」

「なるほど、せめてモンスターの数が減ったら、薬草を大量に買ってクリアできるかな？」

「そりゃカバン一杯に買っていけば半分くらいまでは進めるって誰かがサイトに載せてましたけど、カバン一杯で半分ですよ？そんなのボスまで行けるわけないですよ。」

「なるほどね。じゃあ俺たちがクリアしたらカバン一杯に薬草を詰めてクリアしてみてほしいもんだね。」

「は、はい。がんばってみます。」

ゲームセンター内の俺への信仰はすでに神の領域に達しようとしているようだ。今話をした子たちの中にもＬＶ９を昨日クリアした子が何人かいたらしいので、これが終わったら残った仲間たちと一緒にＬＶ１０ダンジョンに潜ってもらうのも悪くないだろう。そうすれば、こっちの世界をつなぐ扉は閉じられることだろう。

「さて、じゃあ俺たちはダイブするとしようかな。」

「そうね。誰が一番にダイブして向こうの世界に行くかは早い者勝ちよ。」

「そういうこった。負けてらんねぇぜ。」

俺を除く三人は俺のことを置いておいて、さっさとゲーム機の中に入っていくと、カードとお金を入れだした。

「みんなごめんな。みんなと今まで過ごせてすっごく楽しかったよ。」

俺はみんなよりも後にゲーム機にはいると、お金とカードを入れてゲームを始める。

勇者と妖精δ

ピーピーピピピピッピ！

「認証番号一致、リアルダンジョンにようこそ。あなたの名前はガンちゃんさんですね？今からリアルダンジョン始まり都市、セイラへ転送いたします。」

「よう。決めたぜ、やっぱり俺は一人でセイラに行くことにした。」

「そうっぴか。じゃあ勇者様のお婿さんはピルルたちで用意するっぴ。」

「は？お婿様？」

「そうっぴ。またこんなことが起きるとも限らないのに、勇者様の血を絶やすわけにはいかないから、向こうに着いたら、結婚してもらうっぴ。」

ピルルの衝撃的な発言に唖然とする俺だったが、そんなことを考えている間もなく、違う声がピルルの発言を否定する。

「それは無理よ。がんちゃんは私のお嫁さんになるってきまってるんだもの。」

「か、桂！？どうしてここに？」

というか、さっきの発言はなんだ？混乱する俺をそっちのけで桂は

ここにくることができた理由を簡潔に述べる。

「おかしいと思ったのよ。早いもの勝ちなんてルールがね。がんちゃんがゲームに入ってないのに、私達がゲームの中に入れるはずがないって思ったから、がんちゃんがゲームに入るまで待ってたの。」

なんてことはない。俺がゲームに入ってすぐにゲームに入れば引き込むことができるというピルルの言葉を、嘘をついて伝えていたことがバレていたようだ。

「じゃあ幹久と要も？」

「もちろん気づいていたわ。一応本当かもしれないからってどっちかが先に入るって言ってたけど、私が入れたみたいね。」

「まさか三人ともにバレていたなんて・・・」

「がんちゃん。嘘をつく時、目が泳ぐのよ？知らなかったの？」

「まさかそんな癖があったなんて。」

俺のことを理解してくれている友人たちに感謝していいのか、この場合は感謝しにくい気がするのだが、それでも一人で行くよりも安心できる気がして楽になった。

「えっと、話を進めてもいいっぴか？」

「どうぞ。私のことはお構いなく。」

「そうはいかないっぴ。勇者様の体は不死身だから死なないとはい

っても、長い人生飽きてしまわれたら、大変困るっぴ。死ぬ方法がないわけではないからっぴ。だからそれまでに勇者様の血をセイラに残してほしいっぴ。」

「じゃあ、私のことを男にしてよ。がんちゃんを女にできたんだからできるでしょ？」

「ちょま、だったら俺が男に戻った方がはやいんじゃね？」

「勇者様の体を元にもどすことはできないっぴが、ツバサ様の体を今から変更することは可能だっぴ。その代わり勇者様と違って突然変化させることはできないっぴ。かなりの時間がかかるけどいいっぴ？」

「問題ないわ。ついでに私の寿命も長くしてもらえると嬉しいんだけどできるかしら？」

「勇者様みたいに死んでもよみがえることはできないっぴ。でも不老くらいはお安いご用だっぴ。」

寿命が延びればもうけものといった雰囲気で桂は言っていたが、どうやら老いることがないようにできるらしい。ピルルもこんな小さい姿をしていても妖精で勇者の従者という大任を任されるほどなのだ、中々に力をもっているのかもしれない。

結局桂と俺の二人がこのままＬＶ１０ダンジョンをクリアしたらセイラに向かうことになり、桂もこのまま時間がたつにつれ徐々に体が男になっていくんだとか。

「それよりも大変なことがおこったっぴ。ＬＶ１０ダンジョンのボ

スが何かやっていると思ったら、今まで作り上げてきたモンスターたちをセイラに送り込んできたっぴ。このままではセイラの世界は一カ月ももたないで、モンスターに支配されてしまうっぴよ。」

「おいおい、そんなご都合主義な展開あるのか？」

「あるっぴ。だってボスは勇者様がこの狭間の世界に現れたことに気づいたみたいだっぴ。勇者様が現れる周期は決まっているから、それに合わせてセイラへの進軍を開始したみたいっぴ。」

「ああ、すっごい納得がいったよ。そんで、俺たちはどうしたらいいんだ？」

「ＬＶ９ダンジョンに今回はボスが増えていないから、ＬＶ１０のダンジョンのボスを倒してすぐにセイラに飛んで欲しいっぴ。ＬＶ１０ダンジョンのボスを倒せばピルルがこの世界を自由に移動できるようになるから、勇者様たちを迎えに行くことができるっぴ。」

「なぁ、この世界で起きたことは現実世界にも影響するって言ってたよな？」

「そうだっぴ。だから勇者の槍も癒しの杖もセイラの世界に持って行けるから、限界まで強くしておくっぴよ。セイラの世界についても武器が切れ味の悪い武器しかなかったら勇者様が来てもセイラを救うのに時間がかかってしまうっぴ。」

「了解。ところでほかの武器はどうする？持って行った方がいいか？」

「そうっぴね。セイラの世界ではこのリアルダンジョンほど良質な

武器はないから、少し持って行ってくれると助かるっぴ。でも強い武器は災いも呼ぶから、モンスターを退けたらピルルが責任を持って狭間の世界に返しにくるっぴよ。」

「なるほど、とにかくＬＶ１０をクリアしたらピルルとコミュニケーションもとれるみたいだし、後のことはそれからでもいいかな？」

「そうっぴね。モンスター軍の侵攻がもうすぐ始まるし、早いことＬＶ１０のボスを倒してセイラの世界にいるガムンルドラスを倒してほしいっぴ。」

「まだボス的な奴がいることをおしえてくれてサンキュ。」

「どういたしましてだっぴ。それでは良いダイブをっぴ。」

ピルルに皮肉は通じないということを最後に理解して俺と桂はリアルダンジョンの世界へと旅立って行く。

ＦＩＮ

武器情報【１０】

アーチャー&ランサー
スタンダードランス
基本攻撃力１５
マジックランス
基本攻撃力２５（攻撃時１＋ダメージの１%をライフ回復）
勇者の槍
基本攻撃力１００（スタンダードランスの上位版である。）
スタンダードボウ
基本攻撃１
ピアッシングボウ
基本攻撃力８（硬い装甲も突き抜けて攻撃一直線上にいる敵にダメージ）
妖精の弓
基本攻撃力３０（スタンダードボウの上位版である。）

ファイター&ガンナー
スタンダードナックル
基本攻撃力１０
ハードナックル
基本攻撃力１５（すばやい動きで二回敵に攻撃）
破壊の拳（スタンダードナックルの上位版である。）
基本攻撃力７０
手甲
防御動作時に敵のダメージを８０%～４０%のランダムにカット
スタンダードガン（特徴：弓と比べて連射が遅い代わりに遠くから攻撃可）
基本攻撃２

リボルバーガン
基本攻撃力１０（通常ダメージに＋して固定で１０のダメージ追加）
黄金銃
基本攻撃力３５（スタンダードガンの上位版である。）

ライト＆ヘビーウォーリアー
スタンダードソード
基本攻撃力１０
ロングソード
基本攻撃力２０（攻撃時斬撃が伸びて敵に効率よくダメージを与えられる）
刀
基本攻撃力６５（スタンダードソードの上位版である。）
ライトシールド
防御動作時のみダメージの半分をカット
スタンダードメイス
基本攻撃力７
ヘビーメイス
基本攻撃力１５（時々クリティカルヒットが発生・ダメージが二倍に）
勝利の鉄槌（スタンダードメイスの上位版である。）
基本攻撃力６０
ヘビーシールド
防御動作時のみダメージの９割をカット（その重さゆえ動きが遅くなる）

マジシャン＆ビショップ
ロット
基本攻撃力１（敵に火の玉をぶつける）
アイスロッド

基本攻撃力１５（氷の攻撃で敵を少し足止めする）
雷の杖
基本攻撃力３０（敵をしびれさせて少しの間動けなくさせる）
スタンダードクロス
回復力１（聖なる光で味方を癒す）
メディカルクロス
回復力１（回復と同時に味方の状態異常を治療する）
癒しの十字架
回復力２０（複数の味方に回復、状態異常も治療）

その他補足
第一段階の武器は＋値を最大の９９まで上げることができ、すべての追加効果をつけることができる。
第二段階の武器は＋値を２０まで上げることができる。
第三段階の武器は第一段階の武器につけた＋値と追加効果をつけることができる。

武器情報【１０】（後書き）

このあと岩倉翼と桂翼がどうなったのかは、私の住んでいる世界とは違うのでわかりませんが、私たちの世界が平和ということは、きっと二人はセイラを救って世界の危機から守ってくれたことでしょう。

なんちゃって。

まさかこのタイミングで完結と思わなかった読者様も多いことでしょう。でも、物語というものは、最後を夢のある状態で終わらせることがとっても大切だと思っております。リアルダンジョンを抜けた後、二人はここと違う世界とはいえ、物語の世界ではなく現実の世界へと旅立って行ったのですから、リアルダンジョンはここで終わりです。

さて、それでは作者にとってのリアルダンジョンについて少し語ってあとがきを締めさせていただきます。

ズバリ、夢と現実の狭間でしょう。

貧乏だけど友人想いな主人公、不幸にもほどがあるというほど厄介事に巻き込まれる性質のようです。そんな主人公の苦悩とそれを助ける周囲の人間を描ています。作者の別の作品では家族愛が一番に出ていた中、一切家族のことを描かなかった中に、実は家族の愛も盛り込まれていたことに気づいてくださったら幸いです。

それでは末筆ながら読者の皆様に心からの感謝をこめて、本当にここまで読んでくださってありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2891k/

リアルダンジョン

2011年8月22日20時29分発行